

# あたらしい風と創造

創立 30 周年記念誌

# からむし



からむし 57 号

麻生区文化協会



## もくじ

ごあいさつ	会長	菅原敬子	2
お祝いのことば	川崎市長	福田紀彦	3
	麻生区長	多田昭彦	4
	川崎市総合文化団体連絡会理事長	鈴木 穆	5
インタビュー	あさおの文化をはぐくむ		
	映画と音楽が刺激しあう街	佐藤忠男	6
	音楽を通じた地域との連携	下八川共祐	8
	プロ・アマが融合した「わが町」	ふじたあさや	10
	地域と共に歩む民藝	田口精一	12
地域に根ざした文化	過去から受け継ぐ文化の土壌	梶 亨	14
	麻生区今昔物語 残された緑の保全	山室茂樹	18
	川崎の誇る農機具工場「細王舎」の足跡	梶 亨	22
	地域文化を育て 30 余年 細山郷土資料館	山田昌一	23
	郷土愛が支えた柿生の歴史 柿生郷土史料館	佐藤勝昭	24
文化協会の歩み	30 周年を迎える麻生区文化協会を想う	杉本長治	25
	あさお古風七草粥の会	橋本 周	29
	アルテリッカ新ゆり美術展	佐藤勝昭	30
	民藝の女優さんを描くデッサン会	山本絢子	32
	夏休み親子教室	菅野 明	33
	麻生フィルハーモニー管弦楽団	横須賀朝子	34
	麻生洋舞ぐるーぷ	伊藤胡桃	35
	邦舞・邦楽	柳下美津子	36
	吟舞・吟詠	正岡 皎	37
	俳句講座と俳句大会	本玉秀夫	38
	文化講演会	森 妙子	40
	雑学教室	千坂隆男	41
区政とともに	日本初「禅寺丸柿サミット」	菅原敬子	42
	区制 30 周年記念討論会記録	佐藤勝昭	43
文化協会 10 年の記録	10 年のあゆみー平成 17 年から 26 年		45
	役員・監事・部長・受賞者		47
編集後記			48

(スケッチ「高石神社から香林寺方面を望む」佐藤勝昭画)



## ごあいさつ

創立30周年を迎えて

— あたらしい風と創造 —

麻生区文化協会会長  
菅原敬子

麻生区は昭和57年多摩区から分区誕生しました。多摩区文化協会で活動していた方々から麻生区にも文化協会をとの声が上がりました。今年、丁度創立30周年という記念すべき年にあたります。

この30年で麻生区の街の様子は大きく変わり、新百合ヶ丘を中心に新しい商店街や住宅街そして大学や文化施設ができました。今、その新しい街は「芸術・文化の薫り」のする麻生として評価されており、文化協会のこれまでの活動も街づくりの一端を担ってきたのではと思うところです。

20周年以降「文化育み・輝けあさお」を掲げ諸活動をすすめてきました。一つの視点は伝統文化の継承と発展であり、もう一つの視点は高齢化が進む状況だからこそ若者に発信していこうを心がけてきました。

毎年1月7日区役所広場で開催し多くの区民の方々に参加を頂いている「あさお古風七草粥の会」は、平成16年に第1回を開催して以来ますます盛況になり、区民にすっかり定着しています。一方、新しい取り組みの一つとして「アルテリッカしんゆり芸術祭」のプレイベントに「アルテリッカ新ゆり美術展」を位置づけることができ、今年度は第6回を開催しました。これは麻生区美術家協会との共催により一層質の高い美術展として多くの方々に高い評価と賞賛を頂いております。また、夏休み親子教室も新たに大学との連携によってより魅力ある講座を開催することができ、多くの親子の参加と関心を集めています。

この他洋楽、洋邦舞、俳句講座や大会、講演や詩吟、美術、会報の発行等各部門における活動も創意を出し合い充実した内容を展開しております。

30周年を機に「あたらしい風と創造」を掲げました。新百合ヶ丘を中心に発展をめざす麻生区にふさわしい、また若者が住みたくなる魅力ある街の要素として芸術・文化度の高さが問われています。創立以来多くの方々が麻生区の文化推進のために活躍され、今日を築いてくださいました。創立時の理念と熱い想いを忘れずにあたらしい風と創造を取り込みながらこれからも活動して参ります。この間、多くの会員及び関係者の皆様のご指導ご協力に心より感謝申し上げます。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

## お祝いのことば

川崎市長 福田 紀彦

麻生区文化協会の創立30周年を心からお祝い申し上げます。

麻生区文化協会が、1984（昭和59）年の創立以来、菅原会長をはじめ歴代の役員の皆様、そして会員の皆様により、30年の長きにわたり麻生区の文化活動の中心として活動を続けられ、様々なジャンルにわたる地域文化の振興に大きな役割を果たしてこられたことにあらためて感謝申し上げます。

川崎市の細長い地形の西端に位置する麻生区は、多摩丘陵の豊かな自然に恵まれ、歴史と文化に彩られたまちであるとともに、近年では広域交通網の発達により、新百合ヶ丘駅周辺を中心に川崎市の広域拠点として発展してきました。また、麻生区には、文化芸術の発信拠点である



川崎市アートセンターや昭和音楽大学、日本映画大学のほか、市民館や民間の美術館など、文化芸術資源が多くあり、こうした地域資源を活かしたまちづくりが進んでいます。

このような中、麻生区文化協会は、音楽、舞踊、美術などの様々な分野において、関係機関や団体、そして地域の皆様と協力し合いながら多岐にわたる市民文化の創造に努めてられました。文化団体相互の連携を図り、長きにわたり市民文化の振興と発展に向けた活動は、文化協会の皆様の情熱の賜と思います。

麻生区では、現在、川崎・しんゆり芸術祭（アルテリッカしんゆり）や、KAWASAKI しんゆり映画祭、麻生音楽祭など、地域や文化団体、企業等が一体となった文化芸術を通したまちづくりへの取組が実践されています。麻生区文化協会の皆様には、こうした市民主体の文化芸術活動の模範として、今後とも未長く地域に根ざした取組と活躍を期待しています。

川崎市は、今年7月に市制90周年を迎えました。今後とも、麻生区文化協会をはじめ、地域の特色を活かしたそれぞれの地域での素晴らしい取組を地域の皆さんと一緒に広げ、文化芸術を活かしたまちづくりを進めていきたいと思ひます。

麻生区における文化芸術を活かしたまちづくりへの取組が市内全体へ広がり、川崎の魅力として、市外へも発信されていくことを期待しています。

今後の麻生区文化協会のますますの発展と、会員の皆様のご健勝を心からお祈りして、お祝いのあいさつといたします。

## 伝統文化と新しい文化のコラボレーションに期待

川崎市麻生区長 多田昭彦

麻生区文化協会の創立30周年を心からお祝い申し上げます。菅原会長はじめ、歴代の役員の皆様、そして会員の皆様が創立以来30年にわたり、麻生区の文化活動の核として活動を続けられ、様々なジャンルにわたる地域文化の振興と発展に大きな役割を果たしてこられたことに、あらためて深く敬意を表します。

麻生区は多摩丘陵の豊かな自然に囲まれ、有形・無形の歴史的文化財も多く有する地域ですが、1974年の新百合ヶ丘駅、多摩線の開業を機に急速な都市化が進んでまいりました。

貴協会が設立された1984年の麻生区の人口は約10万5千人でしたが現在は17万5千人に迫ろうとしています。当時は毎年3~4千人、人口が増えており、本当に多くの皆さんが麻生区に移り住んで来られました。急速な都市化や核家族化は、地域における絆の希薄化にもつながり、地域社会に様々な影響が及んでいると言われております。

こうした中で、皆様が長年に渡って取り組まれてまいりました伝統文化の継承や、文化・芸術・創造・表現活動は、地域における文化の振興を促すだけではなく、人と人とのつながりを醸成し、人々に潤いを与えていただき、芸術・文化活動を通じたひとづくりやまちづくりにも大きく貢献されております。本当にありがとうございます。

さて、麻生区は文化度が高く、また、芸術・文化関連の拠点施設も多いとの評価をいただいております。この10年を振り返っても、昭和音楽大学の移転開校、アートセンターの開設、日本映画大学の開設、アルテリッカしんゆり等の新たなイベントの開始など、芸術・文化の環境はますます充実してまいりました。また、幅広い芸術文化の分野で活躍されている方々が多く在住されており、麻生区における様々な芸術文化活動にご協力もいただいております。

区役所といたしましても、このような恵まれた環境や豊富な資源を活かした芸術文化関連事業を通じて「芸術・文化のまち麻生」がより多くの皆様に浸透し、また実感いただくことによって、麻生区の活性化とともに、区民のみなさまがより愛着と誇りを持てるまちづくりを進めてまいりたいと考えておりますので、麻生区文化協会の皆様には引き続きご支援とご協力をお願いいたします。

麻生区文化協会のますますの発展と会員の皆様のご健勝を祈念いたしまして、創立30周年を迎えられたお祝いのことばといたします。



## 『麻生区文化協会』 創立 30 周年記念に寄せて

川崎市総合文化団体連絡会理事長 鈴木 穆

今年は麻生区文化協会が創立されてから、30 周年の記念すべき節目の年であります。本日ここに、麻生区文化協会の創立 30 周年記念式典が盛大に開催され、川崎市総合文化団体連絡会に参加する諸団体の大きな喜びであります。ここに総文連理事長として、心からのお祝いを申し上げる事が出来ます事は、私の大いなる喜びであります。

小島（一也）先生の『麻生郷土歴史年表』を紐解きますと、川崎市は 1972 年に政令指定都市に昇格いたしましたから、川崎・幸・中原・高津・多摩 5 区の特別区が誕生いたしました。

さらに 10 年後の 1982 年 7 月に新たに宮前区と麻生区が誕生いたしました。とりわけ、皆様の麻生区は文化芸術の北部の拠点として大きく羽ばたく事となりましたことは、ご案内の通りであります。

私共川崎市総合文化団体連絡会は創立当初、川崎市文化協会、川崎文化会議、中原区文化協会・高津区文化協会・多摩区文化協会の僅か 5 団体で構成されておりました。多摩区文化協会は、後に麻生区文化協会会長に就任される藤田親昌氏の提案でつくり、藤田氏は多摩区と分区後、麻生区文化協会の初代会長を務められました。

藤田氏は「古くからある川崎の文化活動を掘起して、新しい文化を創造してゆこう」を合言葉に、川崎の文化の流れを変え、多面体の市民文化を生活という視点からとらえる場として、総文連機関誌『文化かわさき』の発刊や『多摩地域文化賞』の創設、「北部に文化施設をつくる会」と、次々に新しい提案をされ、麻生区を超え川崎市内の総合的文化運動の基礎づくりに貢献されたのであります。

その後、藤田先生を継ぐ、歴代会長 4 氏が、新生麻生区の文化を特徴付ける諸施策を展開され、本日目出度く、麻生文化協会創立 30 周年の記念の日を迎えられたのであります。

この 30 年間、陰に日向に今日の佳き日の為ご尽力いただきました関係皆様の、ご努力ご尽力に対しまして、深く敬意と感謝を申し上げ、川崎市総合文化団体連絡会を代表しての御挨拶と致します。本日はおめでとうございます。



## 日本映画大学学長 佐藤忠男さんに聞く

### 映画と音楽が刺激しあう街

2011年に麻生区に誕生した日本映画大学の現学長で映画評論家の佐藤忠男さんは、国鉄や電電公社での勤務経験をもち、一般観衆の見方を代弁する形でユニークな映画評論を展開してこられ、その視点は、国内はもとより国際的にも高い評価を受けています。

佐藤さんは、アルテリッカしんゆり実行委員会の委員長として、芸術のまちづくりを推進して来られ、わが文化協会が進める「アルテリッカ新ゆり美術展」のオープニングにも祝辞をいただいております。本会会長の要請を受けて、今年から顧問に就任していただきました。

(聞き手：佐藤勝昭、岩田輝夫)



- 聞き手** 先生の映画評論の視点はユニークですが、若い頃の社会経験が背景にあるのでしょうか。
- 学長** 以前の映画評論は芸術論といった専門的な勉強をした人によるものでしたが、私は、人生経験した一般観衆の見方こそがむしろ大切だと考えてきました。それまであまり芸術性が認められてこなかった「やくざ映画」ですが、庶民に支持されるのはなぜか、その面白さを分析すれば、「自由とあきらめ」という庶民の思想に行き着くわけです。
- 聞き手** 先生の評論は、国際的にも高い評価を受けていますが、そのきっかけは何だったのですか。
- 学長** 私の評論集が翻訳されたのがきっかけでした。外国人からみて、日本の恋愛映画は、欧米のと大きく違うのです。西洋映画では、地位も名誉も或る立派な男が恋をする。西洋には高貴な女性を命がけでまもる「騎士道」があるのに対し、日本の「武士道」では、さむらいは恋愛しない。恋愛するのは、歌舞伎でもあまり出来のよくないやさ男と決まっているわけです。これは、源氏物語以来の日本的なもので、思想史・文学史にも通じる。こういうふうに論じた方が、先輩にいなかったのです。
- 聞き手** やくざ映画は例外だと・・・
- 学長** さむらいは恋愛しないが、やくざなら仕方ないと受け入れた。股旅、旅烏ですね。これは、西部劇の影響を受けています。外国の映画評論は、美術・文学などできあがっている文化の中に位置づけられ純粋芸術論に立っていたのに対して、私はやくざ映画の中に、日本になかった「ヒーローが恋をする」という西洋文化との融合を見たわけです。世界の文化は融合し合っていて、神話なども、世界共通の部分があるのですよ。
- 聞き手** 先生は、国際的視点で、アジアやアフリカの映画の紹介にも取り組んでおられますね。
- 学長** 私は国際交流基金で日本映画の宣伝をするために海外に出かけているうちに、ASEAN 諸国やアフリカ、中近東にも素晴らしい映画があることを知って、これを日本に紹介する映画祭を開催してきました。こういう映画祭の開催は外務省がやるのですが、実際的には自治体がバックアップするのです。自治体は、実務もしっかりしていて、予算の裏付けもあって、すばらしい力があるのです。バブル時代に学生映画祭が渋谷でありましたが、バブルがはじけ、開催できなくなり、それを川崎市のサポートで、しんゆり映画祭として開催したのです。映画祭の事務所もはじめは、映画学校にあったのです。それがのちに自立します
- 聞き手** このご経験がアルテリッカしんゆりに繋がったのですね。



**学長** アルテリッカをはじめるきっかけは、昭和音大がこちらに校舎を移し、大きなホールまでできたのが大きいですね。改めて数えてみると駅近くに10近い施設があるということで、ここで芸術祭をやらうとなったのです。今年は今までになくたくさんの方が入りました。こういうイベントはふつう3年でダメになるんですが、6年もよく続いています。

**聞き手** 文化協会と美術家協会は、アルテリッカ新ゆり美術展をプレイベントとして開催し、チケット販売にも協力しています。

**学長** あの展覧会はレベルが高い。題材もバラエティがあってよいですね。麻生区は、地域全体に住民が積極的に前向きなのがよいですね。今のところは、地域との交流はうまくいってありがたいです。

**聞き手**：大学の設立にも自治体の協力がありましたね。

**学長**： 映画専門学校を改組して大学として認可してもらうには土地をもってなければならぬのですが、川崎市は廃校になった小学校跡地の利用を公募し、大学がその土地を借りることができたのです。川崎市には、新百合ヶ丘の地に芸術系の大学を呼ぶことで、文化的なまちづくりをしたいという計画があり、地主、文化人、行政がその方向で一致していました。

**聞き手** 映画大学では素晴らしい学生さんが、育っていますね。

**学長** 1年生に対して「人間総合研究」というユニークな実習をやらせています。カメラを回す前に取材の仕方からはじめる。学生に、興味を持っている人を選ばせて、その方に対して電話をかけるところから学ばせます。もとは、専門学校時代に今村昌平さんが「日本人は本来百姓だから百姓の視点に立たねば」と言って、農村に学生を送り込んで田植えの手伝いをさせたのです。今は、受け入れて下さる専業農家がなくなって、代わるものとして、「人に気を遣いながら人を観察」することで社会を学ばせているのです。

また、昭和音大とのコラボもしています。映画の作曲を音大の学生にやってもらっているのです。映画大の学生へのよい刺激になっています。

**聞き手** 麻生区文化協会では、若い人に文化活動に参画してもらおうと、夏休み親子教室に昭和音大や、和光大の学生に協力してもらっています。映画大にもお願いしたいと思っています。

**学長** 実は、映画大も、夏休みに中学生対象に「しんゆりジュニア映画制作ワークショップ」を開いています。地域の大人のボランティアが、ロケ地の交渉などをやって支えています。子どもの教育を街の行事としてもできる。作品は、アートセンターで上映会をします。赤い絨毯を敷いて、晴れがましい経験もさせているのですよ。晴れがましい経験は、大変貴重なのです。また、昨年からは小学生対象の「わくわく映画づくり」に学生の教育の一環として取り組んでいます。

**聞き手** 素晴らしい取り組みですね。文化協会にもぜひ力添えをお願いします。本日は貴重なお話をお聞かせいただきありがとうございました。





昭和音楽大学理事長  
下八川共祐さんに聞く

## 音楽を通じた地域との連携



2007年に麻生区に本格的オペラ劇場とコンサートホールを備えた新校舎をもった昭和音楽大学が登場、新百合ヶ丘は名実ともに芸術の街となった。この昭和音楽大学の理事長の下八川さんは、藤原歌劇団において、数々のオペラの制作を担当、1980年からは、藤原歌劇団代表に就任されると同時に、昭和音大を設置する学校法人東成学園の理事長にも就任された。1981年には、財団法人日本オペラ振興会を設立し、現在、同財団の常務理事など多くの要職についておられる多忙な下八川さんにお時間を頂き、お話を伺った。

(聞き手：横須賀朝子・池上裕子)

聞き手 2007年、厚木から新百合に移転されましたね  
下八川 昭和音大の校舎は本厚木の駅からバスで30分、スクールバスで20分のところにあっただけです。昔はそういう遠いところでも北海道から沖縄まで多くの学生が入学してくれましたが、だんだん少子化の影響もあってこれでは大変だなということで、移転先を探していました。1989年、新百合ヶ丘駅北口に昭和音楽芸術学院(専修学校)を設置していた関係

から、新百合ヶ丘駅近辺で探していたところ、りそな銀行さんがグランド跡地利用を考えていらしたのです。そこで、希望に合った駅前の土地なので交渉を始めました。一方、川崎市は「音楽のまち・かわさき」を提唱して公害のイメージ払しょくをしようとしていたわけですが、川崎駅の方には「ミュージア川崎」が、北部には中ホールと小ホールを建設しようという要望に合致したわけですね。オペラやミュージカルに最適の1300人収容の劇場(テアトロ・ジューリオ・ショウワ)と、350人収容のコンサートホール(ユリホール)を作ることを条件に大学移転が本決まり、2007年に移転しました。

聞き手 こちらに移転して変わったことありますか？

下八川 麻生区は音楽・芸術に関心のある方が多いから、学生の公演もやりがいがありますね。公演後のアンケートでは、的確な指摘をしてくださるので、ものすごく勉強になりますね。現在、週末には、ジューリオかユリホールのどちらかで必ずコンサートをやっています。

聞き手 先日のアルテリッカでのコンサートでもチケット売り切れのコンサートがありましたね。

下八川 それだけのお客様がいらっしゃるからアルテリッカもできるんですよ。他の地区ではなかなかできないんじゃないですか。日本の中でも世界的にも。アートセンターがあって市民館があって新ゆり21ホールもいろいろなことができますよね。そして昭和音大北校舎には2つのホールもありますし、新百合ヶ丘駅周辺で9つくらいホールがあるわけですよ。半径300mくらいじゃないですか？こういう住宅地の中心としてこれだけの施設はないでしょうね。

聞き手 大学にホールができ、演奏会を開いているから人が集まるというよりも・・・

下八川 もともとですよ。昭和音大では毎年暮れに「メサイア」を演奏しています。なかなか会場が満員にならなかったのに、大学が移転する前のことですが、麻生市民館で開催したらチケットが売り切れてしまってビックリしました。ここはすごいところだってそのころから思っていました。

聞き手 麻生区の地域住民へ学校の開放等についてはどのようにお考えですか？

下八川 できる限りのことはしていきたい。地域との連携は積極的に取り組み、一般企業との産学連携や、地域との結びつきを大事にしていきたい。それから東京交響楽団や神奈川フィルハーモニーなどのプロの団体や麻生フィルなど地域に根付いて活動しているアマチュア団体などにもお貸しして、いわゆる我々の産学地域連携をしていきたいですね。



聞き手 昨年、文化協会が夏休み親子教室を開催したときにご協力いただきましたが、区内の小学校にパンフを配ったら昭和音大の楽器体験が一番人気ありました。

下八川 回数に限りはあると思いますが、できる限り協力していきますよ。定員を上回るようでしたら言っていただいて、年間に時期を分けて何回か行うとかね。

聞き手 学生さんも授業があるから難しい部分もあるのでは？

下八川 たしかにありますけど。教員になる人もいますし、そうでなくともお子さんを直接教えるレッスンをするということもあるから、大事な機会なわけですよ。

聞き手 音楽教育の教育実習という風にうけとっていただけると、企画する方はうれしいです。

下八川 本学には音楽療法を学ぶコースがあり、卒業後は介護の方に進む学生もいるわけです。

聞き手 シニア世代を対象とした「音楽と社会」という講座もおもちですね

下八川 短大の正規のコースに入学して履修している70代の方もいらっしゃいますよ。また、ご自分のペースに合わせながら、自分の好きな科目を選んで授業を受ける方も受け入れています。

聞き手 話は変わりますがこちらの大学の施設や校舎はオープンで、どこから道路でどこから学校なのかわからないくらいですね

下八川 これは川崎市との連携で、オープンにしてくれといわれたのでオープンにしました。特に土曜日はコリホールに行かれる方などが多いですね。学生が困ると言わなければ芝生でお弁当を食べるなんていうのにもお使いください（笑）「市民交流館やまゆり」に来られたかたも時々お使いになってますよ。ただ、時々校舎内を通り抜けて行かれる方もいて、守衛さんに注意されている人もいますよ。

聞き手 学校にはセキュリティのことなどでご面倒をおかけしているのかと。。

下八川 大学南側の三角スペースが「新ゆりアートパークス」という川崎市の公園になっていますが、公園の手入れをして下さっているボランティアの方々は植物がとてもお好きなようで、毎週丁寧に手入れをして下さるんですよ。ボランティアの方があそこまできれいにしてくださるレベルの高い地域だからこそこちらも合わせていかないと常に心がけております。たまに苦情をいただくこともありますけれども、相対的に地域に溶け込ませていただいているなと感じますね。

聞き手 地域を組み入れてくださっているとしますし、厚木からこちらに来てくださって、本当によかったなと思います。そして昭和音大さんが来てくださったことでこの街がさらにどんな風になっていくのか楽しみです。

下八川 これからもよろしくお願いします。

聞き手 本日は、お忙しいところ本当にありがとうございました。

## 劇団わが町を主宰する脚本家 ふじたあさやさんに聞く

### プロ・アマが融合した「わが町」

麻生区を代表する脚本家であり演出家であるふじたあさやさんは、川崎市による新百合ヶ丘地区の「芸術のまちづくり」を先頭に立って進めてこられました。

2012年6月には「劇団わが町」を立ち上げ、この地の演劇文化の振興に情熱を傾けてこられ、麻生区文化協会創立30周年記念式典において、同劇団による「わが町しんゆり」の公演を企画して下さいました。

川崎市が進める芸術のまち構想を市民側から推進するリーダーとなり、麻生区文化協会を設立して初代会長になられた元中央公論編集長・文化評論社社長の藤田親昌さんはあさやさんのお父上です。（聞き手：菅原敬子、佐藤勝昭）



**聞き手** お父上が川崎市の「芸術のまち構想」に関わられた頃から、そばで見てこられたのですね。  
**ふじた** この地に映画学校の移転の話に市に持ちかけたのは父のようでした。横浜再開発のあおりを受け、当時、映画の専門学院を運営しておられた今村さんが移転先を探していたのを父が聞き、川崎市に話をしたようで、それを受けて川崎市が小田急等と協議をして実現したようです。それからだいぶ経ちましたが、昭和音楽大学(学校法人東成学園)が移転してきて芸術のまちらしくなってきました。

**聞き手** あさやさんは、アートセンターの設立に関わってこられましたね。  
**ふじた** 新百合ヶ丘には麻生文化センターの大ホールがあります。アルテリッカでもメイン会場になっているように、あれだけたくさんの観客を入れることができ、あれだけ舞台の奥行きがとれるホールは東京にもそんなにありません。しかし、左右で音の響きが違う、舞台から花道に出られないなど欠陥もいっぱいあります。私は、演劇にとっての理想的な小屋を目指して、アートセンターを「ため息の聞こえる劇場」にしようと、設計にかかわりました。実際に小劇場の舞台に立ってみると、客席の全員の顔が見えるのです。ただし、小規模なので稼ぎにはならないのですが、・・・(笑)

**聞き手** この地域は文化を受け入れる住民が多いと思うのですが、どうしてだと思われますか  
**ふじた** ここの住民って、殆どがもともと地元の人ではなく、後から来た人なのですね。しかも、老人が多いのです。そのことは、昭和音大が新百合にやってきて、テアトロ・ジューリオができ、そのオープニング公演が5月はじめに行われたときに実感しました。ゴールデンウィークに人がいっぱいいる。(笑)

**聞き手** それがアルテリッカにつながったのですか。



「劇団わが町」公演風景

**ふじた** 川崎市文化財団の北條さんと話していて、芸術系の大学が2つもあるのだから何かやりましようよということになって、佐藤忠男さん、下八川共祐さんに働きかけたところ、みんなやる気になって、さっそく当時の市長に働きかけて、あつというまにしんゆり芸術祭をやることになりました。そのときに、舞台公演やコンサートができるのは幾つあるかと数えたんです。麻生文化センターの大ホール、昭和音大のオペラ劇場、コンサートホール、北口の昭和音大のホール、アートセンター、映画館、新百合21多目的ホール・・・、なんと駅から300m以内に9つもあるよということがわかりました。日本中探してもこんなところはないですよ。

**聞き手** アルテリッカはユニークな芸術祭ですね。

**ふじた** いろんな分野、オペラ、クラシック、ジャズ、寄席、子ども向けの芝居、劇団民藝にも加わってもらい、ジャンルを超えて交流する舞台芸術の大祭典にしようと大風呂敷をひろげました。それが評判になり、6年も続くことになりました。なんとか採算がとれています。

**聞き手** あさやさんは2012年に「劇団わが町」を立ち上げられましたね。

**ふじた** アートセンターの演劇の中心は発足当初は現代舞踏が中心でしたが、地元のためにやってほしいという声がしきりにあって、市民目線での劇団を作ろうということになりました。2012年に、年齢を問わないとして劇団員を募集したところ、4歳から74歳まで60人が集まりました。まったく経験のない人もいましたが、大学や高校で芝居をやったがその後やっていない人、広告業界・テレビ業界の方も仕事をもちながら加わりました。主力は、やはり会社を定年退職した人たちで、一番に来て最後までいて飲み会にいく暇をもてあましている人たちです(笑)。

**聞き手** お芝居の訓練はどうしているのですか

**ふじた** もちろんリードするプロのスタッフが必要です。彼らは、体ほぐし、発声練習など熱心に指導しています。彼らには、ギャランティを払わなければなりません、この点は、実は、アートセンターに寄りかかっています。いろんな形の公のお金を利用しています。稽古場については、昭和音大の演劇部門の部屋をあいているときに使わせてもらっています。昭和音大・日本映画大・文化財団の三者による共同事業体が、アートセンターの指定管理者に認められていますが、大学が入っているのは川崎が最初です。ハードを財団が、ソフトは大学がうけもっています。

**聞き手** アマとプロの協力が大切ですね。

**ふじた** 文化協会はアマチュアの総合体です。それはそれでよいが、それだけでは花が持ち上がってこない。アルテリッカでは、本体ではプロ主導になっていますが、アマは、プレイベントや本番の合唱部分などプロと部分的な接点をもっています。劇団わが町は、アマですが、プロ意識をもって引っ張っていきますので、楽しみにして下さい。

**聞き手** 麻生区文化協会は30年目の節目を迎えて、新しい若い人を加え、若い人に発信しようという方針を立てています。文化協会の今後のあり方に対して提言をいただきたいのですが・・・。

**ふじた** 組織はいったんできると、組織をまもることが自己目的化します。劇団もそうです。これは、本末転倒です。気がつくためには、揺さぶりをかける必要があります。異なるジャンルが発想を持ち寄って総合する、それによってこれまでにない分野が活性化します。そういう試みが必要でしょう。

**聞き手** 参考にさせていただきます。お忙しいところ、貴重なお話をありがとうございました。

劇団民藝 俳優兼舞台美術責任者  
田口精一さんに聞く

## 地域と共に歩む民藝

田口さんは、美大卒業後、劇団民藝（以下：民藝）に入り、民藝創設者の滝澤修さんや宇野重吉さん等の薫陶を受け、半世紀をこす長きにわたり民藝の発展とともに歩んでこられました。民藝が32年前に麻生区黒川に活動の拠点を移してから“地域と共に歩む”という民藝の理念のもとに麻生区の文化活動に数々の協力をしてこられました。

6年前から始まった麻生区の芸術祭「アルテリッカしんゆり」への劇団挙げでの協力はもとより、麻生区文化協会主催の大きな行事である「舞台衣装をつけた民藝の女優さんを描くデッサン会」にも30年にわたってご協力を頂いております。



（聞き手：山本絢子、岩田輝夫）

**聞き手** 民藝が麻生区の文化活動にいろいろ関わっていただけになったきっかけは何だったのですか。

**田口** 麻生文化センターの建設に伴って大ホールを作ることになったときに関わったことが始まりです。初期の頃の文化講座には宇野重吉や北林谷栄も参加しました。当時、私としては藤間勘七孝さん達が主催した“日本舞踊の会”の催しで舞台監督をしたのが麻生区のイベントに関わった最初でした。

**聞き手** 滝澤さんや宇野さんたちが民藝を設立された頃の設立理念が今の若い俳優さん達にどのように受け継がれていますか。

**田口** それが今の民藝にとっての一番大きな課題でして、私自身にとっても死ぬまでの課題となっています。役者の世界だけでなく、どの世界でも同じだと思いますが、厳しさに耐えられなくなってきている人が多くなってきている現在、お客さん方に納得していただける演技をどのようにして磨いていったらよいのかということは非常に難しい問題であります。芸術も含めいろいろな分野でよく、自分が苦労して得たものはなかなか人には教えない。というようなことがあると聞きますが、民藝ではライバルが教えこずするということが当たり前のことで、それぞれが得たものを教えあい競い合う中でお互いを高めあっていくというのは民藝の中での自然な風潮でもありました。仲間同士で切磋琢磨して苦労して会得しようとしなければ身につかないものだとことを滝澤先生なんかいつも言っていました。

## インタビュー



2014年の6月公演『白い夜の宴』の稽古風景



2012年の4月公演『マギーの博物館』の稽古風景

**聞き手** よく芸の世界では、言葉は悪いんですが“他人の技を盗むことも大切”なんていうことも聞きますが。

**田口** 民藝の中では藝や技を盗むということは当然のことで、盗んでいく中で発見があり、その発見の中から自分なりの新しい技を身につけていくということはよくあることです。「人のふりみて我が身をただす」ということわざにもあるように、人の優れたところを取り入れて自分の欠点を直していくというのは芸の世界でも大切なことです。教え合い、盗み合い、競い合って一人ひとりが手問ひまかけて芸を向上させていくことが劇団全体のレベルを上げていくことになるわけです。「舞台でのミスで恥をかくのは劇団なんだよ」と宇野さんなんかはいつも言っていました。

**聞き手** 昔は地方公演の時など、民藝の俳優さん達はみなさんが絵の道具を一緒に持っていったと聞いていますが、今はどうですか。

**田口** 昔、滝澤先生は「絵を描くということは対象をしっかり観察しなければ描けない。特に人物の観察は」とよく言っていました。絵を描き、鑑みるということは役づくりの上達にもつながるものだとということで民藝絵画部では年に数回みんなで展覧会にも行っていました。そういうこともあり昔は多くの俳優が地方公演にも必ず絵の道具を持参したのですが残念ですが最近はそのような習慣が無くなってしまいました。でも嬉しいことに、三年前の「アルテリッカしんゆり美術展」で滝澤先生の絵を観て、3人が絵画部に入ってきました。これからもそういう人達を増やしていきたいと思っています。

**聞き手** 民藝が地域との交流を深めるようになったのはいつ頃からですか。

**田口** 地域と共に歩むという姿勢は前からあり、ある程度は地域の文化活動に協力するとか、地域と交流するというのもやってきたのですが十分なものではありませんでした。全国に劇場や芝居小屋は結構あったのですが、そこでプロの劇団が地域と交流するという事は案外少なかった。そこで劇団と地域が一体となって交流するという視点から宇野さんが宇野重吉一座を立ち上げて地方回りをすることになったのが一番のきっかけだと思います。いろいろ交流していく中で少しでも地域に貢献できれば嬉しいことだと思います。

**聞き手** 現在、全国的に「朗読の会」が広がっていて、田口さんもお住まいの地域でされているそうですが。

**田口** 朗読の会が全国で広がっているということは大変いいことだと思います。各地の放送局で行っている「ラジオでの講読」から派生した会も多いと聞いております。それはそれで勿論良いわけですが、いま私がやっているのは客席の息づかいが聞こえる中で、また、今日の客層は、ということも考えながらやっています。いずれにしても、読み手が作者の気持ちをどのように理解しているかが大切なので何回も読み返す努力が大変ですが、それだけにやりがいもあります。

**聞き手** 今日は貴重な時間をさいいただき、たくさんの楽しい有意義なお話、ありがとうございました。これからは麻生区文化協会としてもいろいろご指導をお願いしたいと思います。

## 過去から受け継ぐ文化の土壌

### 梶 亨

麻生区文化協会の創立30周年にあたり、この地に醸成された文化の土壌について時代を遡りながら考えてみたい。その切り口はいろいろあるが、他の区と大きく異なることは、昭和の中頃から、文芸家達がしばしばこの地に足を運び、移り住んだという事実である。それは、豊かな自然環境や小田急線の開通等とこの地の特性が連鎖的に繋がっていたようだ。昭和2年に小田急線が開通し、人々は経済、文化等の面で大きな影響を受けた。昭和4年に公開された映画「東京行進曲」の主題歌でも歌われたように、小田急線に乗り華やかな東京の文化に触れることが、当時の娯楽の一つになっていた。

こうした人々の行動とは逆に、豊かな自然環境や静けさを求め、多くの文芸家たちがこの地に足を運んで来たのも事実である。中でも、北原白秋は王禅寺の静けさに心を魅かれていたようだ。福岡県の水郷・柳川の酒造り商家に生まれ、若くして詩壇で頭角を現した白秋は、生涯各地を転々と移り住んでいるが、中でも世田谷に住んでいた頃に小田急線でこの地を度々訪れている。玉川学園を訪れる機会（注1）の多かった白秋は、小田急線の車窓から柿のなる柿生の風景を眺め、今までにない秋の風情を感じていたのであろうか。白秋は昭和10年10月に初めて王禅寺を訪れている（町田市三輪の高蔵寺も）。その後もしばしばこの地を訪れるなど、晩年は王禅寺周辺の環境に魅せられていたようだ。



その当時の心境と境内の風景を、白秋は随筆「王禅寺に想ふ」の中で優美に描き出している（一部は原文）。中でも、「その山陰へ取り遺されて、誰ひとり遠くからは詣でに見えさうもない」寺を取り巻く空間の持つ落ち着きと深みのある静けさを、「まことに、この世のものとも覚えなかった」と驚き心を揺り動かされている。そして、その光景の終始を「閑寂相」と表現し、「私は、この発見に魂のをのゝきをすら自らに感じた」と、信じ難い静寂の時空に身を置いた心境を吐露している。境内には、晩秋の柿生の里と禅寺丸柿の赤く色づく風景を讃えた長歌「柿生ふる柿生の里名のみかは禅寺丸柿・・・」の歌碑が、後に建立されている。日本を代表する詩人の一人であった北原白秋により、柿生の里と名産の甘柿「禅寺丸柿」が、文化の風に乗ってより多くの人々に知られるようになったのである。



白秋が魅せられた晩秋の王禅寺境内



もう一人は、片平に居を構えた河上徹太郎である。日本を代表する近代批評家の一人であった河上は、終戦の年に東京大空襲に遭い焼け出されてしまった。河上は、既に東京郊外の鶴川(町田市能ヶ谷)に農家を購入し、「武相荘」と名付けカントリーライフを楽しんでいた友人の白洲次郎に誘われ、2年ほど白洲宅に同居している。その後、尾根続きの片平に居を構え、近くの畑で採れる新鮮な野菜や農家の庭先に初夏になると若葉が輝き、秋にはたわわに実る禅寺丸柿の美味さ、エメラルドグリーンに輝く竹藪に芽を出す筍等々……。雑木林に囲まれた自宅での快適な暮らしと執筆活動に加え、河上邸を訪れる文芸家たちと四季折々の農産物を楽しみながら交遊を重ねていたようだ。河上は、この地域に連なる多摩丘陵の雑木林がお気に入りのようで、「雑木林と畑が美しく配合されている。特に、なだらかな所は、南仏か中部イングランドのような感じが出ているのも一寸珍しい風景だ」と絶賛し、「日本で一番美しい雑木林」(「雑木林から」藤田親昌)と評している。周囲の里山や水田の眺めに加え、点在する農家の佇まいは、訪れる文芸家たちには味わったこともない心地よい農村風景であったのだろうか。河上邸には、庄野潤三、久保田万太郎、三好達治、井伏鱒二、中里恒子、太宰治等の当時の日本の文学界を代表する作家たちが訪れている。

近くには北欧文学の研究者として知られ、詩人、文芸評論家であった山室静邸があり、山室に勧められてこの地に草木寺を創設し、繭の暴落から農家の人々を助けるため、手織り紬づくりを教え、後に「草木染」の命名者となった作家の山崎斌らも住んでいた。こうした豊かな自然を素材にした草木染は、今では染色芸術品として受け継がれている。同じ片平の善正寺には、荻原井泉水らの歌碑があり、日本の民俗学の礎を築いた柳田國男もしばしば柿生を訪れている。また、細山に移り住んだ元



緑の小道が続く多摩丘陵の雑木林

中央公論編集長で評論家の藤田親昌(初代麻生区文化協会会長)は、地域の人々との文化交流は元より、教育、福祉等の様々な分野で独自の交流を重ね、多くの影響を与えた。いま、訪れた文芸家達の層を思うと、他に類を見ないといえるほどの厚みがあり誇るべき文化遺産である。「電車が文化を運んでくる」といわれたように、小田急線を使った文芸家達のこの地への来訪や定住、そして地域の人々との交流は、やがて麻生の貴重な文化の土壌となった。





麻生フィルハーモニー管弦楽団披露演奏会(多摩市民館 1983年10月8日)

こうした文芸家たちの動向を草創期の文化の土壌づくりと捉えるならば、この地が大きく文化的発展を遂げ、今日の文化の土壌を形成したのは、新百合ヶ丘駅の開設と小田急多摩線が開通した昭和49年以降の市民の様々な文化運動によるものと思われる。

川崎北部の人口増加に伴い、昭和57年に多摩区から分区した新しい区「麻生区」が誕生した。人口10万人ほどのまだ小さな区ではあったが、この新しい区の誕生は、人々の日常の文化活動を大きく喚起させた。併せてこの時期と前後して、従来の文化の領域を広げた市民文化や地域文化を求める新しい「文化の時代」も到来した。

この時代の潮流ともいえる新しい文化の動向は、人々の身近な文化活動の拠点となる文化センターの建設にも大きな影響を与えた。施設の中核となるホールは、従来の多目的なホールから「オーケストラが鑑賞でき、演劇の醍醐味を楽しめる川崎北部の文化の拠点にふさわしいホール」を求める市民の新たな運動となって広がった。「麻生文化センター設立署名運動発起人」の名簿を見ると、当時の日本の文芸界のそうそうたるメンバー（敬称略）が名を連ねている。藤田親昌、山室静、小林直樹（東京大学教授）、市川昭介（作曲家）、佐野洋（作家）、岡本喜八（映画監督）、実相寺昭雄（映画監督）等々・・・。

実は、この市民の文化運動は、いくつかの新しい地域文化を生み出している。その一つは、麻生フィルハーモニー管弦楽団の誕生である。日頃から音楽や芸術に親しみ楽しむ市民自らの手で、本格的なホールを作ろうと広がった建設署名運動は、ホールの完成に先駆けて、自分達の手でアマチュアオーケストラを作り運営して行こうという運動にまで発展した。音楽関係者のみならず多くの市民の力で結成された楽団は、地域に深く根を下ろし、昨年秋、創立30周年を迎えた。

もう一つは、「多摩地域文化賞」の存在である。「近代的市民館の建設趣旨」に賛同し集められた基金を活かし、文化に関わる分野で功績のあった人を市民自らが選び顕彰しようという、いわば市民の「草の根文化運動」が結集した賞である。受賞された方々の顔ぶれを見ると、文化活動に功績のあった方のみならず、自然食料理研究家やごみの減量・自然エネルギー活用運動家など、今日の社会の大きなテーマである「食文化、資源再利用文化、農文化」等を探求した方々が顕彰され、その選考に新しい文化運動の視点を見出すことができるとともに、文化に対する認識や行動を一層広げるものとなった。

こうした新しい地域文化のうねりは、様々な芸術文化機関の立地を誘導した。川崎市もこれに呼応し、新百合ヶ丘周辺地域を中心とした新しい芸術文化のまちづくりの展開に動き始めた。30年程前に黒川に稽古場を構えた宇野重吉ら率いる劇団民藝では、稽古場公演により地域の人々との交流を広げ、細山の自宅アトリエを美術館に改装した「中村正義の美術館」では、独自の美術館活動を展開していた。



劇団民藝「坂の上の家」の稽古場公演



こうした中で、川崎市は横浜駅周辺の再開発事業に伴い移転を迫られていた横浜放送映画専門学院(学院長 映画監督・今村昌平)を小田急や映画関係者、文化関係者、地元地権者等の協力を得て、日本映画学校(現日本映画大学)としてこの地に誘致した。これは後の川崎市の「芸術のまちづくり」の大きな推進力になった。事実、川崎市と映画関係者、同校職員、学生、市民など多くの関係者の力が結集した「しんゆり映画祭」が平成7年より始まり、後のワーナーマイカルシネマズ(現イオンシネマ)の進出へと繋がっていった。そして、ここを主会場に回を重ねるごとに「しんゆり」「KAWASAKI」の名を全国に広めた映画祭は、今年20周年を迎えるまでに発展した。

さらに、こうした芸術文化の振興を核としたまちづくりは、厚木に本校舎を置き音楽学院と大学本部を新百合ヶ丘においていた昭和音楽大学の全面移転へと繋がり、麻生区の芸術文化は大きな弾みを付けた。川崎市が描いた音楽、演劇、美術、映画等の芸術文化の拠点づくりは、こうした長い道りを経て今日の「アルテリッカしんゆり」へと結びついて行ったのである。

豊かな自然環境と小田急線がもたらした文芸家達の来訪や定住、そこから生まれた地域との交流。そして、新百合丘の開発に伴い立地した芸術文化機関と川崎市や地域との連携や様々な文化交流・・・。



藤原歌劇団公演オペラ「カルメン」

いま30年の歴史を振り返る時、遠い過去の時代に、この地の自然や風景に心を魅かれた多くの文芸家達の足跡を一つひとつ辿り、その行動に思いを馳せるとともに、磁力を秘めた今日の麻生の文化の土壌づくりと先駆的な文化活動に尽力された先人たちの一方ならぬ努力を次代に伝えていくことは、文化活動に関わる私達に課せられた大切な役目である。

(麻生区文化協会 専門委員)

(注1)白秋は2人の子供を玉川学園で学ばせ、同学園の運動会歌を作词している。

参考文献 「白秋全集 23 詩文評論 9」北原白秋 岩波書店。「自然のなかの私」河上徹太郎 昭和出版。「麻生区の文学鑑賞」渋谷益左右 私設ゆりがおか児童図書館。

写真提供 北原白秋(日本近代文学館)(14頁)、河上徹太郎(岩国市教育委員会)(15頁)、麻生フィルハーモニー管弦楽団(16頁)、劇団民藝(17頁)、川崎・しんゆり芸術祭2013実行委員会(17頁)。

## 麻生区今昔物語 残された緑の保全 山室茂樹

川崎市麻生区が誕生したのは昭和 57 年。31 年前のことで、川崎市が 5 区制から 7 区制に変わった際に、多摩区から分離して産まれました。その母体となったのは明治 22 年に成立し昭和 14 年から川崎市に編入されていた柿生村、岡上村で、そこに生田村の一部が加わって麻生区となりました。従って公募された区名応募には「柿生区」が圧倒的に多かったのですが、この地が中世から麻生郷と呼ばれていたことから「麻生区」と決定しました。

現在の麻生区といえば、近代的な街並から川崎の新都心とも呼ばれる新百合ヶ丘駅の周辺がまず頭に浮かびますが、それは歴史的に見ればほんの最近のことで、昔の麻生区の様子を調べることは、主として柿生村の歴史を調べることで、幸い資料もいろいろ手に入りましたのでそれらを参考に昔の姿を探ってみました。

### ●大昔の麻生区のあたり

麻生区は川崎市の最北部、多摩丘陵の南端に位置していますが、この多摩丘陵が生まれたのは、百万年位前と推測され、それ以前は古東京湾と呼ばれる浅い海だったようです。このことは区内各地で採取される貝の化石からも明らかです。

また、特筆すべきことは、昭和 2 年に「あけぼの象」と呼ばれる象の化石の一部が発見されたことで、「柿生から象が・・・」と当時の話題を集めました。その後この地は海に戻ったり、陸地になったりを繰り返していたようです。

### ●縄文時代の麻生区のあたり

麻生区に隣接する稲城市からは、南関東最古といわれる約 5 万年前の旧石器が出土し、黒川東遺跡からは約 2 万年前の旧石器が出土しています。これらのことから多摩丘陵には 5 万以上も前から人類が生息していたことが判ります。

さて、縄文時代の前期・中期(6000 年前～4000 年前)になりますと麻生区のほぼ全域にわたり集落のあったことが遺跡の発掘により明らかとなっています。すなわち黒川東、栗木北、金程向原、五力田西、上麻生、山口台、王禅寺日光台、片平仲町、細山板東谷、岡上丸山、早野、万福寺等の集落の遺跡です。しかし縄文時代の後期になると、遺跡はめっきり減少し、さらに弥生時代に入ると、集落跡は皆無と言ってよく、時たま「弥生式土器」の破片が見つかるだけです。なぜそうなったかは定かではありませんが、富士山の噴火の影響、気候変動なども考えられますが、最大の原因は食料生産、特に稲作の普及により、丘陵地を下り、より広く水利に恵まれた低地に住居を移したことによりでしょう。その証拠に、鶴見川に面した町田市三輪町からは弥生時代の遺跡が発見されています。

古墳時代より江戸時代までのことは、力及ばず省略させて頂きませんが、鶴見川流域に多くの横穴古墳のあることを記すに留めます。



黒川の遺跡地跡



●江戸時代から昭和 35 年

江戸時代に入ると徳川家康の直轄領に組み入れられ、配下の旗本が知行しました。農民の暮らしは微に入り細をうがって規制され、年貢の取り立ても厳しく、零細農家の多かったこの地では、夜逃げをしたり、離村したりする者も多かったようです。

江戸時代の農民の貴重な現金収入源としてその生活を支えてきたものに禅寺丸柿と黒川炭があります。禅寺丸柿は麻生区きっての古刹、王禅寺の周辺の山で発見されたといわれ、禅寺丸の名称は徳川家康がつけたとも言われています。この柿は馬の背に揺られ江戸市場に届けられ、1650年頃には柿の王座に位したそうです。天皇陛下にも献上されたこともある由緒正しい甘柿ですが、近年は市場性が弱まり、わずかに禅寺丸柿保存会によってワインに加工される等して命運が保たれています。

黒川炭が初めて作られたのは江戸時代の中頃といわれ、以後およそ200年の長きにわたり現金収入源として生活を支えてきましたが、昭和30年代になるとプロパンガス、都市ガス、石油等におされ減少の一途をたどり、昭和60年に伝統の火はついに消えました。

また、明治時代に入ると、生糸の輸出が盛んになったのに伴い、柿生村でもほとんどの農家が養蚕を手がけるようになりました。明治、大正、昭和と農家の暮らしを支えてきた養蚕も、戦後の化学繊維の登場で衰えはじめ、昭和30年代にはわずか10戸ほどとなり、やがて消滅してしまいました。

●現在の麻生区

昭和2年、小田急線の開通により柿生駅が誕生し、都会への距離はやや縮まりました。しかし人々の暮らしは昔のままで、全くの農村地帯といえるものでした。それが戦争をはさみ、昭和35年に百合丘駅および百合丘団地が誕生したことにより人口の増加が始まり、次第に麻生区の中心は柿生から百合丘へと移って行きました。

さらに現在の麻生区の姿を決定したのは昭和49年の新百合ヶ丘駅の開設、小田急多摩線の開通です。これにより麻生区内の駅は、五月台、栗平、黒川を加え6駅となり、多摩線沿線は都心のベッドタウンとしての開発が進み、人口は急増、新百合ヶ丘駅周辺は近代的な街へと変貌してきました。それまでは緑に囲まれたのどかな農村地帯だったこの地が、現在の姿になったのです。

今や麻生区は、芸術・文化の街として、音楽の街として日本文化の一翼を担う街として注目を集めています。比較的若い世代の居住者も多いことから、これらの世代を巻き込んで、ますます発展していくことが期待されます。





夏菟山修廣寺緑の保全地域

●麻生区に残された自然を守ろう

麻生区の発展は、自然環境の破壊を代償に行われてきました。芸術の街をめざす麻生区にとって、街の景観および街を取り巻く自然環境を維持、改善していくことも大切な課題でありましょう。

自然環境の維持改善の中心的課題は、区内に残された緑地、樹林地の保全です。幸いにして麻生区には、いまだかなりの面積の山林と緑地が残されており、川崎市の中では最も緑の多い区であります。山林には区の花であるヤマユリをはじめ、キンラン、ギンラン、ホタルブクロ、ワレモコウ、ジュウニヒトエ等の可憐な花々も見られ、また黒川地区では蛍の舞が見られる等の貴重な自然が残されています。



キンラン



ギンラン

川崎市では遅まきながら平成 7 年に「緑の基本計画」を策定し、「多様な緑が市民をつなぐ、地球環境都市かわさきへ」の基本理念のもと、緑の保全、緑化の推進に関する諸施策を進めております。具体的には、特別緑地保全地区の指定、緑の保全地区の指定、市民緑地の指定等で、これらいずれかの指定を受けた緑地は麻生区内で 30 箇所を越えています。

また、これとは別にまだ緑地の指定を受けていない樹林地もあるのですが、それらは主として土地所有者の相続問題等により年々減少傾向にあり、この傾向に歯止めをかける施策も待たれるところです。さらに、緑地の指定を受けたからといって、その緑が永遠に保たれる保証はありません。その緑地が公有緑地か私有緑地かによってもおのずと問題点も異なるわけです。私の住居近くの「夏菟山修廣寺緑の保全地域」については修廣寺の和尚さんが「私の目の黒いうちは開発は許さない」と仰っているので当面緑は保たれそうですが、その先は不透明です。その他の緑地についての情報は調べていませんが、各々の緑地について状況はことなるはずで。

次に緑地およびその他の樹林地の維持、管理について考えてみましょう。これらの樹林地は、昭和 30 年代までは土地所有者によって見事に管理されてきました。自宅での燃料に、また現金収入源としての木炭用の樹木を得るために、山林の管理は当然のことだったのです。それが、燃料がガスへと代わり、炭も作らなくなってきたからの山林は、入る人としてない荒廃した姿へと変わりつつあります。

そのような山林を緑地に指定した場合、まず為すべきことは下草の刈り取り、下枝伐り、間伐、時によっては、植林等でありましょう。



多摩自然遊歩道

しかしそれらの作業を誰がやるのかが問題であります。山林の所有者は高齢化が進み、その子どもたちも地元離れの傾向が強い今日、所有者に適切な管理を期待することはできません。従ってその維持、管理は土地所有者の同意の下、川崎市緑政局の指導を得て市民等がボランティアとなって保全活動に取り組んでゆくことが必要不可欠であります。すでに活動を始めているボランティアグループも数多くあります。ご苦労様です。

早野聖地公園の場合、およそ70名の里山ボランティアが、時には東京農業大学生の助力を得ながら、緑地の保全に努めていますが、これはむしろ例外的に理想的に管理されている例であり、全く手つかずに荒れ放題となっている緑地、山林が多いのです。しかしそれはそれで、「自然には人間が手を入れるべきでない」と主張する人もいますので、管理すべきか、放置すべきかについても、ケースバイケースで論議されるべきでありましょう。



「緑を守り自然を守る」言うは易くして中々に難しいことではありますが、我々一人一人がそのことの大切さを実感することが問題解決の一助となることを願って拙文を終わります。

●自然豊かな麻生区の見どころ

- ・ 早野聖地公園ー7池を配した公園墓地
  - ・ 王禅寺周辺ー禅寺丸柿原木、白秋歌碑
  - ・ 多摩自然遊歩道ー読売ランドに至る
  - ・ 修廣寺周辺ー珍しい植物が多い
  - ・ よこやまの道ー樹木の中の稜線の道
  - ・ 高石神社ー芭蕉句碑はじめ51句碑
  - ・ 麻生川の桜並木ー花どきには桜まつり
- その他多くの見どころがありますが割愛します。

参考文献

麻生郷土史年表 小島一也  
 ふるさとは語る 柿生郷土誌刊行会  
 わがまち麻生の歴史三十三話 高橋嘉彦  
 写真：瀬野あずさ、スケッチ：佐藤勝昭

(麻生区文化協会 副会長)

## 川崎の誇る農機具工場「細王舎」の足跡

「ガーコン、ガーコン・・・」という長閑でリズムカルな音が、日本全国の田園地帯に響き渡る時代があった。細山の細王舎で製造されたミノル式足踏み脱穀機を農家の人たちが使う音で、明治・大正期にかけての稲刈りが終わった頃の日本の秋の風物詩でもあった。

細山で製材業を営んでいた箕輪庄左衛門の息子政次郎は、明治21年に繭から糸を巻き取る座繰機等を製造する細王舎を設立した。細王舎の名は、夫妻の生まれた細山と王禅寺から名付けたといわれる。「ザグリヤ」の愛称で農家の人たちに支持されていた細王舎は、足踏み糸取機等の開発、製造を行っていた。製造に当たっては、近くを流れる小川を利用した発電機で工場の電力を賄っていたというから、その発想力には敬服するところが多い。

政次郎の息子・亥作の時代になると、足踏み脱穀機の改良により細王舎の名は全国に知られるようになった。農機具工場が建ち並び、最盛期には300人程の人が働いていたという。細王舎の研究、改良の傑作といえるのがミノル式足踏み脱穀機。大正の中頃になると、ミノル式が千歯扱に替って全国に広まり、農作業は一気に省力化され、「ミノル式親玉号」は、国内はもとよりアジアの各地でも利用されていた。

細王舎で働くことは、当時の人々の誇りでもあったようだ。従業員を大切に、農家と共に生きる細王舎の経営方針は、娯楽の少ない当時の人々にとっても楽しい交流の場であった。社員家族は元より、地域の人々も交えた映画会等の開催は、楽しい文化活動の場でもあり、その経営姿勢は、後に数多く立地した川崎の工場の原点ともいえる。



昭和15年頃には、足踏みに比べ効率の優れた動力脱穀機を開発。28年には、アメリカの農機具会社と提携して汎用小型耕耘機メリーティーラーの販売を始めた。さらに、これに独特の改良を加え、耕耘機、搬送車としても使える軽量小型機を普及させた。映画にも登場したメリーティーラーは、エンジンを消毒用の噴霧器として使い、若者はマイカー替わりに使うなど農家の人たちの人気者であった。

しかし、戦後は大手企業の参入により、昭和43年にその輝かしい歴史の幕を閉じた。日本の近代産業の中核として発展してきた川崎市。その中でも北部農村地帯の工場として、先進的な開発と工夫、努力により一時代を切り拓いた細王舎の足跡は、わがまちの誇るべき遺産である。

(麻生区文化協会 専門委員 梶 亨)

参考文献 クォーターかわさき 第10号「おらが村の細王舎」川崎市。「近代川崎の人物伝」川崎市市民ミュージアム  
写真提供 川崎市市民ミュージアム 梶 稔

## 地域文化を育て 30 余年

### 細山郷土資料館

細山郷土資料館(郷土館)は、昭和50年西生田小学校創立百周年記念に際し、郷土の農具、民具、古文書等を展示したことが契機となり、都市化によって住む人の生活様式も変わり、ゆい(助け合い)の精神もうすらぎ、郷土に伝わる貴重な汗のにじんだこれらの資料が失われ行く現状を考え、

これらの貴重な心と物の伝統文化の保存の重要性が問われ、後世に伝える手段として郷土資料館が昭和55年5月に開館され、33年の月日が流れて今日に及んだ。

その間地域でいろいろの分野で活躍しておられた先生方や小学校の先生方に専門委員として協力していただき、一般の方や小学生を対象に郷土館に展示収納されている物を実際に使った体験学習(親子ふるさと教室)、記念講演、いろいろな地域の文化を学ぶための研修会等が行われてきた。脱穀から白米まで、そば・うどん作り、竹細工、からむしの糸作り、わらじを作り地域を歩く、やじり作り等々。活動の内容については毎年発行されてきた細山郷土資料館の館報に納められているが、よくもこんなと思われる程の活動に頭が下がる思いがする。これもひとえに地域の人々の愛郷の精神によるものだろうし、地域文化はこうした心があってはじめて築かれ、守られて行くものではないだろうか。こうした郷土に密着した文化活動は高く評価され、平成10年には川崎市文化賞を受賞した。

郷土館はその後、金程地区の造成により発掘された縄文集落の出土品、縄文土器類を展示、保存するため、2号館が建設された。文化財に指定されているものもある。

それを機に郷土館に土器の会が結成され地元の役員等が中心になり土器研究、土器作りが行われ、子供たちに土器づくりの指導を行い縄文の暮らしにも挑戦、竪穴住居づくりまで子供たちと行った。



民家の座敷

またこの地域に生育している多くの山野草が造成で失われていく様を見て、山野草の保存、育成化につとめるため山野草の会が生まれた。毎年山野草の展示会や配布等も行っている。草木染めなども行ってきた。

郷土館で毎年正月の7日に行われてきた「古式七草粥」は今麻生区文化協会が受け継ぎより多くの方に体験してもらうため麻生市民館の広場で行われ、新年を祝う行事として定着している。文化協会の夏休み行事なども郷土館で行ってきた「親子ふるさと教室」の行事

事と思いを一つに盛んに行われている。

こうした活動が今後の麻生の文化とし、「温故而知新」次世代に受け継がれ育まれて行くことを願うものです。

(麻生区文化協会 顧問 山田昌一)





## 郷土愛が支えた柿生の歴史 柿生郷土史料館



「麻生郷土歴史年表」を自費出版され、「柿生郷土史料館」の設立に努力された郷土史研究家で柿の実学園理事長の小島一也さんに、柿生郷土史料館開設のいきさつについてお話を伺った。

柿生中学校の改築に当たって、特別教室を整備して郷土の史料を収集展示しようという機運がたかまり、史料館設立委員会が発足、小島一也さんが委員長となる。各町会、町会長に賛同の署名をもらって、教育委員会に持っていき、史料館にする許可をもらった。

整備には同窓会の協力で集めた募金の一部を使った。内部には、講義室・展示室に加え、床の間のついた和室がある。「このような温かい雰囲気 of 史料館は、公のお金ではできないが、民の力を加えることによってできたのです」と小島さん。

史料館では、元柿生中学校長をはじめ郷土愛に燃えたかたがたが、運営委員会を作り、歴史のお勉強のセミナーを開催している。これまでに開いたセミナーは42回にもなるという。この中から育ったボランティア数名を加え、20人以上が活動している。町田市からも勉強に来る。

小島さんは、こういう活動を通じて、ここを観光の拠点にしたいという。史料館は、「柿生文化」という広報誌を出している。

(からむし55号より抜粋 聞き手 佐藤勝昭)  
スケッチ：佐藤勝昭

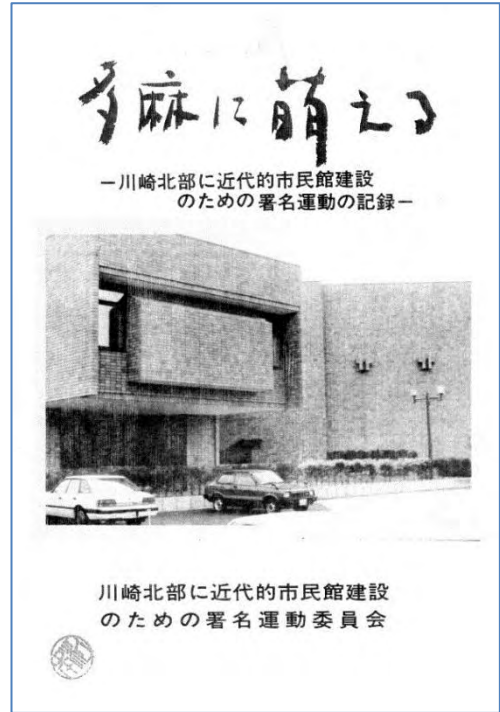
## 三十周年を迎える麻生区文化協会を想う

杉本 長治

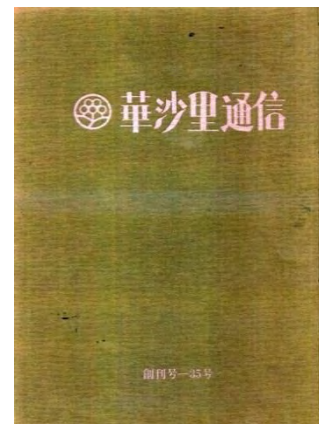
### 多摩に萌える

記念誌「多摩に萌える」の中で、初代区長西村俊行氏は次のように述べている。「待望してやまなかった麻生文化センターが、いよいよ7月にオープンすることになりました。ここに至るまでの経過を振り返りますと、感慨ひとしおのものがあります。昭和57年7月、私は多摩区長になりましたが、その頃から既に分区作業が始まりました。それに呼応するように、区内の文化人グループが発起人となり、新区に近代的な文化会館をとの運動が澎湃として起こってまいりました。(以下略)」それまでの区の文化施設は、社会教育法第五条の「公民館」として設立されるもので、現在の市民館のような大きな施設ではなかった。

しかし、麻生区、多摩区の文化に関心のある多くの区民は「近代的な市民館を作ってもらおう」と署名活動と運動資金のカンパを精力的に行った。運営に関わった方は111名、署名数は65,000人余名。資金カンパは279万円の多額であった。ちなみに、発起人の何名かを記すと、代表は藤田親昌(評論家)、山室静(著述業)、小林直樹(東大教授)、市川昭介(作曲家)、柏木俊夫(学芸大名誉教授)、野口力(読響打楽器奏者)、丘みつ子(女優)、岡本喜八(映画監督)、安喰虎雄(画家)、志村昇(郷土史家)、村田静夫(町会長)さん等々多彩であり、現在も文化協会で活動しておられる菊池武久、藤間勘七孝さんも委員として活動された。



百合ヶ丘児童合唱団の第1回定期演奏会(1977年3月)



このような多摩区・麻生区の区民の萌えるような活動の前提にあるのが、活発な区民の文化活動であった。昭和45年には「百合ヶ丘児童合唱団」、58年には「麻生フィルハーモニー管弦楽団」、59年には「楽友協会」が発足し、活発な活動をしていた。活動の一端は「華沙里通信」にも見られる。多くの方の情熱的な活動によって、文化発信の市民館が誕生したことを決して忘れてはならない。

## 特色ある文化活動

ある区の文化協会の会報の座談会記事に「北の方の文化協会にアカデミーという部があるが・・・」と皮肉?に書いてあった。部の構成、活動は地域の状況、会員の意識によって変わってきている。これからも変わっていくだろう。

麻生区文化協会	A文化協会	B区文化協会
文化サロン部	芸能の部	工芸部
舞台芸能部	展示の部	展示部
美術工芸部	個人の部	地域振興部
アカデミー部		福祉文化部
広報部		音楽部
		俳句部
		広報編集部

### 歩く雑学教室

会報「からむし」の1号で、当時の運営委員の前川朋子さんは次のように述べている。「アカデミー部門では三つの講座を予定した。短歌講座、ギター講座、歩く雑学教室であるが、係の努力により進めていくことができました。

歩く雑学教室というタイトルを決めるときに、郷土史、歴史、社会、理科、音楽、文学、演劇とだんだんエスカレートをし、それでは全部まとめて歩きながら学ぼうではないかと欲張り、歩く雑学教室と名づけられました。(以下略)」



「いきいきとした川崎の教育を目指して」との「川崎市教育懇談会」の報告書がある。昭和59年、60年にかけて市民総ぐるみで行われた教育集会の報告書である。その中で、文化について、次のように述べられている。「広い意味にとらえるとき、文化とは、一つの社会に生きる人間集団の行動様式ということになります。(略)生産の仕方、衣・食・住をはじめとする生活の仕方、考え方に、ある共通したところがあります。その共通したところを文化とするわけです。これに対して、一般には、知、徳、体のいずれかにすぐれた人を文化人と呼ぶように、科学、芸術、道徳あるいはスポーツを文化としております。この文化の二つの姿は、切り離して考えられるべきものではありません。後者は前者を基底にして、人類が長い歴史の中で、前者から昇華させた成果であります。私たちは前者を根の文化、後者を花の文化と呼んでおこうと思います。(以下略)」

雑学教室は、まさに根の文化・花の文化を学んでいることになる。

### 野外写生大会

参加者は思い思いの場所を決めキャンパスに向かう。指導の美術家協会の先生方が、一人ひとりの絵を見て指導する。終わると集まり、作品の評をする。先生方の評は様々である。親しい画家に「先生によって評が違うね」と言ったら「画家はいいたいことを言うからね」とニヤッと笑われた。





## 七草粥の会

1月7日、区役所広場で新春を彩る七草粥の会がある、麻生区の伝統行事として、市民から親しまれている。この会は、細山の郷土資料館で文化協会役員・運営委員の新年を祝う会として行われていた。和田治夫さんが、昔の七草粥の再現ということで骨を折られた。麻生区の活動の根元となっていた。

しかし、参加者が少なくなっていったので、会員以外の区長さんなど行政の方、親しい方にも声をかけるように変わった。参加された区長さんなどの「こんな良い催しを文化協会の役員だけの会ではもったいない」との感想から、区の助成を受け区役所広場での区民対象の催しとなった。

しかし、問題はあった。広場で火を燃やしてはいけない、ということである。やむを得ず、市民館の料理室でおかゆを作ることにした。ところが大きな問題が出た。1月7日は、正月の行事が終わりホッとする時である。「1月7日は困る」と女性委員から強い意見が出たことである。しかし、7日にやることに意味がある、と納得してもらった。次に出たのは、七草採りである。まだ七草がない、ということ。これも自然の残る細山、次に黒川でということ、和田治夫さん、川端俊さん、吉沢伊佐夫さんの労を煩わした。また、米提供の吉沢伊佐夫さん、野菜の提供の宮野薫さん、中山茂さん、餅提供の子ども会、炭提供の早野聖地公園のボランティアの皆様の協力があつた。感謝。

お粥は100食から始まり、今年は800食。担当者は目の回るような忙しさであった。子供に対する対応も、羽子板などを用意するなどきめ細かい用意があつた。また、麻生童謡をうたう会(会長・麻生文化協会会長の菅原敬子)の出演もあつた。正月らしい書初めは笠原秋水さんの揮毫(大きな紙 4mx4m)に固唾をのみ作品を見て感動する。正月らしい雰囲気盛り上げるお囃子・獅子舞は、細山だけでなく、麻生区内のお囃子に交代で出演してもらい、地域理解の一助とした。会員の努力により、年々充実している。

## 夏休み親子教室

協会は、成人の学習、活動と考えがちであるが、子供に文化を伝え、未来を切り開いてもらうことも大切である。本会では、平成12年、事務局を担当してもらっていた中嶋嵯智子さんが、折り紙の会長であるので「お楽しみ玉手箱」を企画した。当時、子供たちの興味の主であった「ピカチュウ」の折り紙である。

会報「からむし」30号で、当時の区長の峰岸是雄さんは次のように書いている。

「・・・(略)大人が始めた「お楽しみ玉手箱」の試みは何を目指しているのだろうか。当日の杉本会長の玉手箱からなにかが飛び出した。昨年小学生32人ぐらいで、一週間ぐらいサマーキャンプに行った。全く他人同士でも、直ぐに打ち解ける。生活のルールも簡単に作ってしまう。そして、農業や漁業の体験をすれば生業になりきっている。子どもの新しい状況への適応力は素晴らしい。将来、玉手箱から、新しい麻生文化が創られるかもしれない。」





アルテリッカ新ゆり美術展

「お楽しみ玉手箱」が好評であったので、その翌年、子どものための茶道(加宮宗節)、日本舞踊(藤間勘七孝)、生け花教室(麻生いけばな協会)が行われ、発展して「夏休み親子教室」の活動となった。昨年も、会員が得意とする分野で夏休み親子教室が開かれた。18の講座に300名余りの児童が、文化協会会員の指導に目を輝かせていた。特筆することは、和光大学、昭和音楽大学等、区内の教育機関のご協力である。

### アルテリッカ新ゆり美術展

21ピルの会場に足を踏み入れ、「アッ」と息をのむ。100号の絵の大作、そして書。フロアの中心には生け花の大作が人々の目を引き付ける。小ぶりの作品も、陶芸作品も存在感がある。これは、しんゆり芸術祭のオープニングであり、麻生区文化協会美術工芸部門と麻生区美術家協会の展示である。「これが1つの区の美術展か・・・」と感動する。

### 連携による活動の充実

夏休み教室ではないが、田園調布学園大学の文化祭への協力や県立麻生総合高校の協力でDVD「ふるさと麻生」の作成も行われた。夏休み親子教室には、前述のように、近隣の大学のご協力をいただいた。これからも、麻生区内の教育機関、団体との連携・協力を得ながら、文化振興の活動が行われることを期待したい。なお、麻生区役所、麻生市民館、麻生図書館からは常に、ご理解、ご協力をいただいていることに、心から感謝したい。

### 会員の受賞

文化活動に貢献したことにより、藤田親昌さんは「川崎市文化賞」(昭和50年)、渋谷益左右さんは「子ども文庫功労賞」「川崎市文化賞」(平成8年度)、麻生フィルハーモニー管弦楽団は「川崎市文化賞」(平成8年度)、中島豪一さんは「川崎市文化賞」(平成18年度)、佐藤英行さんは「上野の森美術館展大賞」(平成24年)を授与されている。また、麻生童謡をうたう会(菅原敬子会長)は、ロシアのサンクトペテルブルグでの国際民族の歌と舞踊大会(平成25年)において「特別賞」授与の栄に輝いた。

### 文化は自由

前述の「多麻は萌える」の委員長の藤田親昌さんは、報告書の末尾で次のように述べておられる。

「文化活動は自由でなければいけません。これに携わる人間は、自分を完成させる必要があります。一度、花が咲いた見事さも、それに参加する人間の動きによって枯れることもあります。

自分だけを押し出すことはやめましょう。地域みんなで腕を組める大切さを、私は言いたいのです。」

(麻生区文化協会 元会長)



藤田さんが他界された後、雪子夫人からいただいた色紙。私の宝物。

## あさお古風七草粥の会

文化協会主催の「あさお古風七草粥の会」は、例年1月7日に麻生区役所広場において盛大に開催され、正月の風物詩として定着している。麻生区新春の一大イベントである。このイベント

の成り立ちには長い歴史があり、昭和61年、アカデミー部が「古風七草粥の会」として細山の郷土資料館で新年会を開いたのが始まりである。翌年から文化協会の新年会を兼ねた行事として取り組まれてきた。その後、平成16年に当時の杉本会長や区長らが有意義な伝統行事を広く区民とともに楽しめる会にしようと「あさお古風七草粥の会」として区役所広場で開催され、現在に至っている。



七草摘み風景



餅焼き風景

鍋へと運び込む。粥をうつわに配食する女性陣はてんてこ舞いの大忙し、嬉しい悲鳴である。

来場者は、七草粥を味わいながら、会場で繰り広げられるお囃子や獅子舞・おかめひょっとこ踊り、正月遊びやわらべ唄・童謡をうたう会の合唱、書家笠原秋水氏と子どもによる揮毫、文化協会の活動状況の写真やパネル展示、七草の鉢植え見本などを見て・触れて・感じての体験を通して、伝統文化の継承に繋がり、楽しいひとときを過ごしている。

この事業は、6年前から区の「ふるさとあさお再発見事業」となり、文化協会が受託するようになった。当日、粥を無料で提供したところ、来場者から「粥をただで頂くのは申し訳ない。」との声が多く、翌年から募金箱を置き、義捐金をユニセフや読売光と愛の事業団へ毎回5万円程度を寄贈している。結果はからむし誌上や総会資料で報告している。



配食風景

(麻生区文化協会 総務 橋本 周)

## アルテリッカ新ゆり美術展

私たちは、長年にわたり、「麻生区に本格的なギャラリーを」という願いを持ち続けてきました。2008年度になって、新百合21多目的ホールにギャラリーとして使える設備が設置され、ようやくその願いの一部がかないました。

2009年にしんゆり芸術祭（アルテリッカしんゆり）がスタート、9会場を使って音楽・映画・演劇の祭典が開催されましたが、残念なことにこの行事に美術展は含まれておらず、新百合21ホールでは「ドラえもんの原画展」のみが開かれました。

「麻生区の美術家や美術愛好家による作品展示を」という文化協会の菅原敬子会長らの強い働きかけが実って、10月になってホールを管理する川崎市文化財団から、「3月に麻生区美術家協会と麻生区文化協会の共催で美術展をやりませんか」というお誘いがかかったのです。

準備期間が非常に短いので心配でしたが、せっかくの機会であるから、美術展を成功させて、本格的ギャラリー設置へ向けてアピールしたいという合意ができ、両者の代表からなる実行委員会が動き出したのです。





川崎市文化財団からは共催としていただき、アルテリッカのイベントとして会場使用料の一部負担、案内はがき・ちらし・ポスター印刷費の全額負担など、全面的なご支援をいただくことができました。麻生区美術家協会の作家が大作を披露。麻生区文化協会も、書の大作、会場中央には生け花共演、さらには写真・陶芸の力作が並びました。また、文化協会主催の「民芸の女優さんを描くデッサン会」参加者による作品展にも力作が寄せられました。

翌2010年からは、アルテリッカ実行委員会において正式にイベントと位置づけられ、「アルテリッカ新ゆり美術展」と名乗ることになりました。また、2010年からは（財）川崎市文化財団が会場費および施設使用料をご負担いただけるようになりました。寺尾前理事長、北條理事長の労に深く感謝します。

2011年には、劇団「民藝」の俳優の作品の特別展示が行われ、2日目(3月1日)15:00-16:00にホワイエにおいて劇団民藝絵画部を主宰する俳優田口精一氏によるギャラリートーク「役者が絵を描くとき」が開催され、30名の聴衆が耳を傾けました。翌2012年には、これまで一般の目に触れることのなかった滝沢修先生の扮装画と自画像の2点が展示され、マスコミにも取り上げられました。2013年、2014年には、美術家協会の画家が、自分の作品について語るギャラリートークが実施され、好評でした。毎年、1300～1700名の参観者があり、あさおの春のイベントとして定着してきました。

アルテリッカ新ゆり美術展の成功は「あさおの美術力」の力強さをはっきりと示しています。今後とも、地域の美術家による地域に密着した美術展を継続していき、この地に、ちゃんとした美術展示ができる公共施設の実現をめざしたいと考えています。



美術家協会出品者によるギャラリートーク

(アルテリッカ新ゆり美術展 実行委員長 佐藤勝昭)



## 舞台衣装をつけた民藝の女優さんを描くデッサン会

平成 26 年 6 月 1 日（日）の午後、今年も、『舞台衣装をつけた民藝の女優さんを描くデッサン会』が麻生市民館大会議室で催された。このデッサン会は、麻生区文化協会ができてすぐ開始され、今年は 30 回目の節目の会でもあった。

参加者は新百合ヶ丘近郊の方はもとより、今年は佐世保市や埼玉県・千葉県など、かなり遠方からの来場者もあった。デッサン会の魅力が、参加しようという気持ちをそそり、一年ぶりの再会もさらにうれしく、心温まる光景があちらこちらにみられた。



継続は力というように表現もいい意味で進化し、素晴らしい作品が多く制作された。静かな室内は緊張感と熱気が漂い、真剣なまなざしで筆を走らせる姿はさながら美術学校の入学試験みたい。

緊張感の中にも創造する喜びは何よりも大きい。わくわくしながら描き始めた。

モデルさんにもそれが伝わり、デッサン会場は、まさに演じる側と描く方が一体となった創造の空間であった。

モデルは新澤泉さんといまむら小穂さん。将来が囑望される若手の女優さん。

以前にモデルをやってくださった女優さんの弁、「描いてくださった絵をみると、いかに私が自分自身を知らなかったか気づかされました。描き手の方の目が、私の全てを見透かしているような怖さを感じながらも、自分と向き合っているようで、とても良い経験でした。」と言い、いまむら小穂さんは、「みなさんの作品の中に、たくさんの私を描いていただきました。たった一人の人物をこんなに何通りにも表現できる、芝居もこんな風に、自由に創造していいのだと気づかされました。私もみなさんの絵のように、生き生きとした人物を演じていきたいと強く感じました。」と、デッサン会の感想を述べてくれた。

民藝絵画部主宰の田口精一さんは、折にふれ、滝澤修先生が残してくれた理想を説き、伝え、女優さんたちもその思いを受け継いで実践している。そして私たちも毎年得難い贅沢な時間をいただいている。

毎年、「アルテリッカ新ゆり美術展」にデッサン会の作品を出品してもらっている。展覧会場に作品がならんだとき、一作一作、丹念に見ていくと、再び新たな感動がわいてくる。心を込めてかいた作品からほとばしるパワーといえよう。長年絵を描いていてもその時々によって出来上がる作品は違う。それにはモデルさんの演じる芝居の人物像があり、描く立場の気分もあろう。

作品は作者の自分史でもある。デッサン会終了後のみなさんの満ち足りた表情に、かかわったメンバーも幸せを感じながら会を閉じた。

(美術工芸部 部長 山本絢子)

## 夏休み親子教室

今日、子どもたちを見守り育てていくということの中で「地域の教育力」が問われています。麻生区文化協会は以前より、未来の文化の担い手である子どもたちとその親たちに、日本の伝統文化にふれる機会をつくってきました。平成12年の「お楽しみ玉手箱」を起源として、「お茶をたてる」、「お花をいける」、「日本舞踊」などが行われました。その趣旨を引き継ぎ、平成15年度から「夏休み親子教室」という名称で麻生区の小学生とその親を対象にして講座を開いてきました。そして、「地域を知る」、「粘土でつくる」、「毛筆で自分の名前を書く」、「筆で絵を描く」、「和太鼓」、「絵手紙」、「洋舞」、「御手玉」、「夾ケチ染め」、「マイうちわ」など講座を増やしてきました。

19年度の神奈川科学アカデミーの藤嶋昭先生による「光触媒の不思議」、20年度の藤間熙子先生による「自然を計ってみよう」、24年度から佐藤勝昭先生による「ソーラーカーをつくって遊ぼう（太陽エネルギー）」といった新しい科学の分野にふれる講座も組んできました。親と子が科学へのおもいを膨らますよい機会になったとおもいます。



25年度親子教室では、区内の大学へ働きかけて「若い力」の導入を試みました。和光大学かわ道楽のみなさんによる「鶴見川の生き物」、昭和音楽大学の「音の世界に飛び出そう」という講座ができて、その趣旨に应运いただきました。今後の展開を期待しているところです。

学校は、2学期制になったこともあって、各学校による夏休みの行事が組まれてきており、そうした行事と重なるということもありますが、文化協会の親子教室もなお望まれていると考えています。区の小学生の1割に近い応募がありますが、各教室には会場の広さや内容から人数に制限がありますので、半数以上もせっかくの応募をお断りしなければならなかったということがあります。教室数を増やしてきた（昨年度は18教室、今年度は17教室）という経緯はありますが、どう応えていくかという課題があります。

この事業は、講座を開いてくださる方はもとより、協力者、サポーターとして裏で支えてくださる方々の力とボランティアとしての自覚があってこそ推進していくことができます。会員の皆さんの総意を集めてよりよく発展していくことを願っています。

（夏休み親子教室実行委員長 菅野 明）



## 麻生フィルハーモニー管弦楽団

麻生フィルハーモニー管弦楽団は昨年が創立30周年でした。

麻生区が多摩区から分区し、新百合丘駅前にホール建設の予定という情報がきっかけとなり、「地域に根ざしたアマチュアオーケストラを作ろう！」という機運がたかまり「マイタウン」紙で募集したところ、150人位の呼応があり、昭和58年（1983年）4月に結団式の運びとなり誕生しました。



昨年30周年を迎えた麻生フィルハーモニー管弦楽団

その後、春と秋の定期演奏会、

麻生音楽祭におけるファミリーコンサート等積極的に演奏活動を行い、平成8年（1996年）には麻生区文化協会の推薦により「川崎市文化賞」をいただきました。平成11年（1999年）からは年末恒例の「かわさき市民第九コンサート」、平成16年（2004年）からは川崎駅西口に出来たミューザ川崎シンフォニーホールでの「ミューザ川崎市民交響楽祭」にも参加、「しんゆり・芸術のまち」「音楽のまち・かわさき」を盛り上げる役割の一端を担うようになりました。

昨年4月28日には、再開されたばかりのミューザ川崎シンフォニーホールで「創立30周年記念コンサートⅠ」を開催することができました。この演奏会では麻生区合唱連盟の応援を得て、マーラー作曲交響曲第2番『復活』を演奏しました。この曲は200名以上の合唱とソプラノ、アルト2名のソリストと100人以上のオーケストラが演奏する大規模な曲でした。予定していた指揮者が本番直前に急病となるアクシデントがありましたが、指揮者の弟子である広上淳一氏の素晴らしい指揮のもと大変盛り上がる演奏ができたこと、関係して下さった皆様のおかげと感謝しました。

そして11月3日には麻生区文化祭のなかで、「創立記念コンサートⅡ」として30年前の披露演奏会で演奏したドヴォルザーク作曲交響曲第9番「新世界」とこれからへのチャレンジとして、リヒャルト・シュトラウス作曲交響詩「英雄の生涯」を麻生区在住の横島勝人氏の指揮で演奏しました。指揮者の熱意と団員たちの音楽に対する篤い思いが客席にも伝わったとの声が寄せられ、とても嬉しく思いました。

文化協会が30周年を迎えた今年は「あたらしい風と創造」のスローガンに対応し、これからの日本クラシック音楽界を担っていくであろう才能ある若い指揮者松浦修氏とソリストに伊藤悠貴氏を迎えて第60回定期演奏会をします。

「川崎市文化賞」を受賞した時に当時の団長の挨拶は「皆様に関心を持っていただけるオーケストラになった。次は皆さんに「感動」していただけるオーケストラを目指したい」でした。この目標をこれからも持ち続けたいと思っています。

（麻生フィルハーモニー管弦楽団団長 横須賀 朝子）

## 麻生洋舞ぐるーぷ

麻生区文化協会の創立とともに、文化祭を通じて麻生区の洋舞の団体が集いました。構成メンバーが多少変わりながらも、現在7団体が「あさお洋舞ぐるーぷ」として活動の輪を広げています。文化祭参加は勿論、文化協会周年事業のつと、仲間であり良きライバルでもある私たちが互いに認め合い、グループ合同の舞台を創り上げ、また2年に1度のかわさき市民芸術祭においても、各スタジオから出演者を募り麻生区ならではの参加をしてまいりました。



特に2010年麻生市民館で開催された第26回芸術祭では、阿部孝夫前川崎市長にご覧いただき高い評価を頂いたのに加え、文化協会より文化振興賞を受賞いたしました。舞台は一見派手なものですが、日頃の指導はコツコツと根気のいる地味なものでありご褒美は大変励みになるものでした。どの団体も幼児から成人まで幅広い年齢の生徒さんを指導し、30年の間に会った人々の数は計りしれないでしょう。それぞれのスタジオから巣立って行った人の中には、国内外で活躍中のダンサーや舞台スタッフほかクラシックバレエやダンス関連の仕事についている人達が大勢います。30年前と現在では私たちを取り巻く社会環境や人的環境も少なからず変化し時の流れを実感します。最近学校でも盛んにダンスが取り上げられるなど、観る側にとどまらず自ら踊る側に立つという機会が増えているようです。

そのような流れの中で、おけいこ事から始め、バレリーナやダンサーを目指す人達、健康や生涯学習を目的とする人達が、それぞれが夢や目標をもちながら、芸術を愛する心を大切に長い時間をかけて培われた経験は、例え目標が別のものになったとしても生かされるに違いないことでしょう。踊ることを追求しながら自分を探し、向上心や情熱を失うことなく、心身を鍛えていくことに大きなそして深い意味があります。教えられる人とともに教える人も同様です。



30年を経てメンバーも年齢も重ねました。これから若い方々の力を大いに期待しているあさお洋舞ぐるーぷです。

(あさお洋舞ぐるーぷ 伊藤 胡桃)

## 邦舞・邦楽



「光陰矢の如し」、麻生区文化協会も創立30周年になりました。「芸術の街あさお」にふさわしく、それぞれの分野の活動は芸術性の高いものです。この伝統を若い世代に引き継いで行きたいというのが私たちの願望です。

平成25年の文化祭において舞台芸能部・邦舞邦楽部門では、いつもの23団体・個人の出し物に加え、団体や流儀の枠を超えた演目と東百合ヶ丘保育園のお小さい方の出演を企画しました。

文化祭で保育園の子どもたちが踊ってくれたのは、沖縄の踊り「ヨサコイエイサー」です。保育園の園長が沖縄で本物の「エイサー」をみて、そのすばらしさに感激、子どもたちに衣装を着せて踊らせたらどんなに可愛いかと考えたことに始まった演目とか。園長は沖縄で生地を調達、子どもたちに合わせてすべての衣装を手作りし、年長組は太鼓を持ち、年中組は鳴子を持って踊りました。歌詞は独特の沖縄言葉なので戸惑ったようですが、興味を持って楽しく練習したそうです。本番では保育園がトップバッターでしたので緞帳の開く前、場踏みをしましたが、幕が上がったら今までに踊ったことのない広い会場、大勢の観客にビックリしたとのこと。しかし立派に踊ってくれました。保護者や園の関係者から「貴重な体験をさせていただいた」と感謝されました。



文化祭の最後の演目は、団体や流儀の枠を超えた出し物、「浦島太郎」を演じました。

これは参加した各団体から出演者が出るというこれまでにない経験でしたが、出演者の協力で素晴らしい舞台になり、お客様からも大きな拍手を頂きました。

昨年の文化祭の新しいところみが、文化協会の「あたらしい風と創造」につながることにできれば幸いです。

(舞台芸能部 運営委員 柳下美津子)

## 吟舞・吟詠



手元に平成4年の麻生区文化祭のプログラムがあります。その当時は7団体が参加しておりました。第20回の文化祭では現在の4団体になっており、その後代表の先生方も4人が故人となりましたが、残された我々は、先生方の遺志を継いで各会協調しながら秋の大会を盛り上げて今日に至っております。その間、漢詩の吟詠のみならず詩の朗読、詩舞、剣舞、民謡の踊り、短歌、俳句、新体詩の朗詠など多彩な内容を展開して参りました。

詩吟は腹に力を入れ大きな声を出して吟ずることでストレスを解消するので健康によく、また詩文を誦そらんじて吟ずることから記憶力を高め、脳を活性化させるので老化を防止させる効果があると言われております。現に会員の中には80歳代、90歳代の方が元気で活躍されております。

今年は30回の記念大会でもあり、一般の方々にも詩吟に関心を持って頂き、詩吟を始めて頂けたらと、特別プログラムで詩吟教室を開くことにしました。奮ってご参加下さい。今年は記念大会を盛り上げるため、各会で知恵を絞って例年にないプログラムで、皆様のご期待にお応えしたいと願っております。

向後は、会員の若返りと、会員の増強を図りながら40周年に向かって邁進したいと考えております。  
(舞台芸能部 副部長 正岡皎)

## 俳句大会

麻生区の地域は、まだ子規が「発句」を俳句と命名していない明治



第25回俳句大会

治の中期から、農村青年の教養と娯楽を兼ねて発句（俳句）が取り入れられ郷土文学として培われ、風土となった。高石神社の杜には俳聖芭蕉や郷土の俳人の句碑が51基も建立され、お伊勢の森句碑村と呼ばれて俳人達の憧れの地となっている。麻生区文化協会では、創立後直ちに地域の俳句の風土に着目、地域の文化の育成と地域の文化交流の手立てとして、俳句を奨励し麻生区文化祭のメインイベントの一つとしての麻生区俳句大会は今年度で26回を迎えるにいたった。今年は麻生区文化協会創立30周年を記念してアカデミー部では俳句大会の投句の募集を「ジュニア」層にも呼び掛ける手立てとして、麻生区内の小学校の校長会に協力をお願いし、当面は小学5年生を対象に俳句の投句を募集することとなった。このことにより麻生区文化協会の標榜の『文化育み輝けあさお』の達成をさらに強力に推進したい。

### 麻生区俳句大会市長賞入賞作品

第17回	平成17年10月29日	端居して此の家のこの先のこと	町田市	田口素子
第18回	平成18年10月28日	球審の身振り大きく雲の峰	麻生区	加宮由登
第19回	平成19年10月28日	歩けると言う幸せの夏帽子	麻生区	前田博子
第20回	平成20年10月25日	手を握るだけの看取りや明け易き	麻生区	大谷長平
第21回	平成21年10月31日	忘却の日々を広げて虫干す	相模原市	森 一枝
第22回	平成22年10月24日	大花野天地一つになりゆけり	麻生区	清水幸子
第23回	平成23年11月 5日	三陸の弱音吐かざる鉄風鈴	麻生区	有我行子
第24回	平成24年11月 3日	落蟬の鳴き尽したる軽さかな	麻生区	本玉秀夫
第25回	平成25年10月27日	初蟬や五百羅漢に千の耳	麻生区	本玉秀夫

### 応募者数・応募句数

回	第17回	第18回	第19回	第20回	第21回	第22回	第23回	第24回	第25回
応募者数	150	128	143	165	123	125	123	142	167
応募句数	500	424	540	620	470	452	465	508	555

### 主催 アカデミー部

部長	吉田功			
俳句大会、俳句講座	17回,18回	19回,20回	21回,22回	23回,24回,25回
実行委員長	馬場身江子	白井爽風	藤田 皓	本玉秀夫

## 俳句講座

アカデミー部では、俳句に関係するさまざまな話題を知り、さらに地域や世界の知識を広げるための講座を開設している。最近の9年間の講座の講師と『演題』を表に示す。

平成 17 年度 8月31日/9月6日/9月13日	平成 18 年度 8月22日/8月29日/9月5日	
1. 綾野道江先生 俳誌「麦」同人 『俳句の詠む楽しさ、詠む喜び』	1. 中村菊一郎先生 「青芝」主宰 『俳句における比喩』	
2. 山元志津香先生 「八千草」主宰 『季語の伝説的なお話』と添削	2. 橋爪鶴間先生「麦の会」会長 『俳句の鑑賞ということ』	
3. 水野 春雄先生 「馬酔木」主宰 『俳句と食』	3. 山岸吟月先生 さざなみ」同人 『当季雑詠について』	
平成 19 年度 8月28日/9月4日/9月11日	平成 20 年度 8月26日/9月2日/9月11日	
1. 徳田千鶴子先生「馬酔木」同人 『俳句の周辺』	1. 西来みわ先生「全日本川柳協会」理事 『俳句と川柳』	
2. 佐尾和子先生「白神ぶなつこ教室」代表 『白神山地の自然に魅せられて二十年』	2. 杉 良介先生 「狩」同人 『俳句の話と実作指導』	
3. 杉 良介先生 「狩」同人 『俳句の破調について』	3. 大久保白村先生「日本伝統俳句協会」副会長 『俳句 あれ・これ』	
平成 21 年度 8月25日/9月1日/9月10日	平成 22 年度 8月24日/9月7日/9月15日	
1. 草鹿庸次郎先生 元 NEC 常務 『心のままに生きる』	1. 山崎せつ子「麦の会」副幹事長同人 『歩き編郎』	
2. 太田土男先生 「草笛」代表 『自然と俳句』	2. 梶原美邦先生 「青芝」副主宰 『語源を識って俳句を愉しむ』	
3. 山元志津香先生 「八千草」主宰 『今をたのしく詩う十七音』	3. 市川草人先生 「さざなみ」同人 『郷土の農詩人を追って』	
平成 23 年度 8月30日/9月6日/9月13日	平成 24 年度 8月28日/9月4日/9月11日	
1. 池内英夫先生 「さざなみ」代表 『俳句と魚の歳時記』・『俳句の実作指導』	1. 柏原眠雨先生「きたごち」主宰 『俳句の構造-連歌史との関連で-』	
2. 坂手美邦先生 「きたごち」同人 『俳句で歩くお江戸日本橋』	2. 太田土男先生「草笛」代表 『俳句の三つの場』	
3. 森 妙子先生 文化協会文化サロン部長 『ボリビアの青い空の下で』	3. 山室樹声先生「さざなみ」同人 『父、山室静と昔の麻生区』ほか	
平成 25 年度 8月27日/9月3日/9月13日		
1. 我妻民雄先生「小熊座」同人 『同時代の作家たちと私』		小林和男先生 講座風景
2. 吉森正人先生 「さざなみ」会員 『文学に現れる星と宇宙』等		
3. 講師 小林和男先生 ジャーナリスト 『見落としている日本とロシアの関係』		

(アカデミー部 副部長 本玉秀夫)



## 文化講演会 講演とピアノ演奏

### ワルシャワの成立と芸術 ～ショパンとその時代～

講師：川染 雅司氏（昭和音楽大学教授）

一天にわかには掻き曇り、雷と激しく吹き付ける暴風雨のなか、講師の川染先生を昭和音楽大学に訪ねた。天候同様、今回の企画は先行き不透明かと心配しながら。なぜなら、私たちは「演奏会だけでなく、その前に、若かりし頃留学されたポーランドのお話もと、大変欲張りなお願いをしたかったからある。ピアノ演奏会は数々あれど、今回のような企画は滅多にないだろうとご迷惑と思いつつお願いした。

しかし、川染先生は私たちの心配を一気にふきとばすような返事をくださった。「私も麻生区の住人です。また、私たちの昭和音楽大学は新百合ヶ丘にあり、学生たちも、地元の皆さんに大変お世話になっていますから、皆様方のお役に立てるのでしたら喜んで。」と快諾してくださったのだ。

当日もまた、台風接近のニュースが流れ、講師の先生にもお客様にも申し訳ない気持ちであった。出席者も予約されたのに来られない方々もいた。悪天候だったので、無理もなかった。

講演では、たくさんの映像を使って余りなじみのない国ポーランド、そして、首都ワルシャワの様子を歴史なども含めてわかりやすく伝えて下さった。ご自身の体験を踏まえての話は非常に興味深く、観光ツアーではなかなかわからない人々の考え方や気持ちまでも伝えて下さり、お蔭でポーランドが一気に身近に感じられるようだった。

ピアノ演奏は、幻想即興曲・ノクターン・マズルカ・ポロネースなどショパンの名曲の数々で、それらが川染先生の手にかかると繊細かつ迫力満点。ある時はやさしく奏でるように、またある時は強烈に迫ってくるように。そして、時に自然と笑みがこぼれたり、ゆったりとした気分浸ったり、聴衆はその音色にすっかり魅了されてしまった。大会議室のため、コンサート向きにはできていないのだが、すぐそばで空気までも振るわせ、下からも響いてくるような演奏は格別であった。アンコール曲が終了しても拍手はなかなか鳴り止まなかった。〈至福のひと時〉を過ごし、満ち足りた思いを共有できた聴衆の皆さんは、会場の片づけにも積極的に協力して下さった。そこでの話題は、ポーランド・ショパンの話、興奮冷めやらないピアノ演奏や、ぜひ第2弾もという次への期待の話であった。そして、会場をあとにする観客の皆様方の表情は、外の悪天候を吹き飛ばすような晴れやかな顔・かお・顔であった。講師の川染先生のお蔭で皆様に喜んでいただけるような素晴らしい文化講演会ができ、心から感謝申し上げる次第である。



#### アンケートから

- ◇ ショパンやポーランドについての講演は、川染先生の人柄がにじみ出ていて、笑いのエピソードもあり、また歴史の話の時もユーモアがあって、とても楽しい時間でした。また映像が加わってわかりやすかったです。
- ◇ ピアノ演奏は、心に響き見事で、心が洗われるようでした。雰囲気もとても良かったです。
- ◇ 講演と演奏の組み合わせという企画が素晴らしく、このように背景を伺って演奏を聴くという設定は、大変興味深いものとなりました。

(文化サロン部 部長 森 妙子)

## 雑学教室

麻生区文化協会が、1984年の結成以来「雑学教室」を毎年継続して実施してきたことは、区外からの移住者が多数をしめる麻生区に於いて、「地域を知る」「地域に学ぶ」ことの大切さを示したものである。



「雑学」とは何を指すのだろうか、考察したい。種々雑多な方面に渡る研究・知識を指す。そしてそれは他からは軽蔑、自己は謙遜の意に用いられる場合が多いとある。人間が生を営む「地域」の解明は、科学の1部門でできることではない。人文・社会・自然の諸科学を駆使してこそ光が見えてくる。

故に「雑学教室」は単なる寺社めぐりや故事来歴の説明に終わってはならない。これを切り口として参加者が「地域」に目を向ける一助となるものでありたい。

平成20年度からの「雑学教室」でのテーマを列記する。

- 21年 3月 31日 稲毛三郎重成と稲毛七福神
- 21年 12月 6日 組合村から区制へそして自由民権へ
- 22年 11月 27日 津久井道を歩く
- 24年 2月 19日 都筑郡の夜明けと終末
- 25年 3月 9日 橘樹郡の夜明けと終末
- 25年 10月 26日 地図でたどる麻生の移り変わり

最近麻生観光協会が麻生区内の名所旧跡寺社めぐりを始めている。麻生区文化協会の設立理念に立ち返り内容の深化・体系化が求められる。

「雑学教室」はアカデー部が主催するであれ、文化サロン部が主催するであれ、この理念に立ち返り進めていきたいものである。要は、内容が如何に区民の皆さんの関心事であり、学術的内容が提示できるかに掛かっている。

「地図でたどる麻生の移り変わり」講座で提供した資料について触れたい。

1. 明治14年 迅速地図 1/20000 複製
2. 昭和4年 1/25000 地図 複製
3. 昭和42年 1/25000 地図 複製
4. 昭和51年 1/25000 地図 複製
5. 昭和16年地図 参考資料
6. 昭和40年代川崎市  
王禅寺・白山 1/5000 参考資料
7. 行政区画の変化年表
8. 交通・鉄道・道路年表
9. 河川洪水工事年表
10. 伊藤葦天著「川崎風土記」(にっぽん)



1から4までの地形図に資料を読みながら書き込んでいく作業は、参加者の興味をひき、熱心な話し合いがあった。

(麻生区文化協会 専門委員 千坂隆男)

## 日本初「禅寺丸柿サミット」

「禅寺丸柿」の原木がある星宿山王禅寺は、戦乱によって消失、その後 1370 年朝廷の命によって等海上人が再建、将軍が所領の見廻りにこの地を訪ね甘柿の見事さに驚き「王禅寺丸」と命名したとされています。

平成 7 年 11 月には NHK の「小さな旅」でも柿の里として全国に放映されています。

このような歴史を持つ禅寺丸柿サミットを区制 30 周年記念事業として開催しようと実行委員長中山茂氏、相談役に中島豪一氏他 25 名によって実行委員会が結成され、平成 24 年 10 月 21 日新百合 21 ホールにて各方面の方々の知恵と協力により 700 名の参加者を得て盛会に開催されました。

当文化協会は麻生区制 30 周年を記念して「区の花」「区の木」を決めてほしいとこれまで行政に提案してきましたが、その年に事業として取り上げられ区民の投票によってそれぞれ「ヤマユリ」「禅寺丸柿」が選ばれ、式典において決定発表されました。また、当日の展示会場作りは文化協会の佐藤英行氏によるレイアウト、資料作りと展示を中心に会員の協力を得て、一日で終了するのは勿体ないほどの素晴らしい会場となりました。

禅寺丸柿の歴史や柿を取り巻く状況等の資料と貴重な写真や書の展示、壇上には柿と柿の木のオブジェを飾り、ロビーには麻生区小学校 16 校の子どもたちの禅寺丸柿の絵の展示等を行いました。交流会では文化協会の方々により「禅寺丸音頭」（作曲・市川昭介氏、作詞・志村昇氏）が賑やかに踊られ、大きな拍手を頂きました。ロビーでは、禅寺丸柿、禅寺丸柿ワインや柿を使ったお菓子等も販売され賑わいました。今後も禅寺丸柿が伝承するように 10 月 21 日を「禅寺丸柿の日」とすることに決め、歴史に残る一日となりました。



シンポジウム  
「禅寺丸柿が地域歴史にはたした役割」  
・パネラー

伊勢原市子易（子易柿 町田市小野路町 国分寺市東元町 茨城県つくば市 埼玉県川越市 麻生区岡上	木村 弘氏 小島 寛氏 金子政次氏 三谷宜仁氏 井上 浩氏 宮野 薫氏 コーディネーター 高桑光雄氏
---	--



(会長 菅原敬子)





## 区制 30 周年記念討論会

「麻生区の 30 年の歴史とこれからを語る」

麻生区文化協会は、平成 24 年 10 月 5 日、麻生区役所に協力して麻生区制制定 30 周年記念パネル討論会を、麻生区役所で開催しました。ここでは、その一部を再録しておきます。

**菅原**：麻生区は文化芸術の街として充実してきました。平成 24 年は分区から 30 年です。分区に関わった方々やその後の発展に尽くして頂いた方々に来て頂きました。

**西村**：【政令指定都市指定】昭和 47 年 7 月 1 日、川崎、札幌、福岡の 3 市が政令指定都市になりました。急激な人口増加で分区する必要性が認識されていました。昭和 32 年から 38 年に人口は 50 万を突破、その頃から、政令指定都市（人口 100 万以上）移行ということは話題になっていました。昭和 46 年 8 月 国

から 3 市が指定都市に移行することが決定、昭和 47 年に川崎区・幸区・中原区・高津区・多摩区の 5 区が誕生。その当時から、その後の人口増が見込まれ、特に高津区、多摩区はものすごい人口増になってきました。

【分区の経緯】昭和 56 年、小田急が新百合ヶ丘周辺地区の区画整理の中で、将来、市民館・区役所・保健所・・・を網羅した土地が必要ということで、市で準備されていました。新区は新百合ヶ丘に設置されることが当時から言われていました。そんな中、3 月新区開設準備委員会が設定されました。1 年にわたっていろいろ審議が行われ、昭和 57 年 7 月に麻生区が発足しました。川崎市は、人口動態を配慮して分区を考えていました。そして昭和 57 年、高津から宮前区が分区すると同時に多摩区から麻生区が分区し、川崎市は 7 区になりました。分区の考え方は、人口急増・都市化進展が著しい地域に分区によって行政サービス向上を図るということでした。行政区の人口規模は 15 万から 20 万が適正といわれてきたのですが、7 区にして近い将来各区 17 万の都市にしたいと、そんなことで麻生区が誕生しました。

【区名制定のいきさつ】昭和 56 年 1 月区名選定委員会が発足。28 名の委員が指名されました。委員は、市議・各界代表・市民（一般公募）から構成されました。S56 年 2 月から 3 月にかけて 5 回にわたって審議しました。第 1 回には、歴史的・簡潔・他区と紛らわしくないという 3 つの原則が決められ、市民の意見を反映しようということで一般公募をしました。その結果、柿生区・百合ヶ丘区・山手光区・麻生区から選ばれることになりました。さらに審議の結果、柿生区・麻生区に絞られました。麻生は、歴史的に古くから使われ、8 世紀から「からむし」を広く産した土地として記述されていました。一方、柿生は上麻生が中心で、他地区の住民には柿生の名称に抵抗がありました。歴史学者の村上先生の意見を受けて麻生は歴史的由来があることが答申され、最終的に委員会は 1 票差で麻生区に決定したのです。

**菅原**：中島豪一さんは新百合ヶ丘の開発、街作りの中心となって来られました。そのあたりのことをお話しください。

**中島**：さきほど西村さんからは、行政の立場に立った細かい話がありましたが、私どもは裏で仕事をしてきました。私と西村さんはたまたま同じ年（1925 年生まれ）で、多摩の新区準備室以来懇意なつきあひがありました。先ほどの話はあくまで表向きの話で、裏にはいろいろな話がありました。

【区名制定のいきさつの裏話】麻生区に決まっただけの裏には、高石・細山が生田村から分離して参加したということがあったのです。柿生区になると、高石・細山には柿生村に合併されたという感じを持つ人がいました。市議会議員同士、町会同士で話し合いました。今でこそ、麻生に入ってよかったという声を聞きますが、当時はいろいろあって、飲み屋で調整するなどいろいろありましたが、おかげさまで円満に今日を迎えることができました。

【新百合ヶ丘駅付近の開発】私は、昭和 52 年から新百合の開発に務めました。ある日突然山の中に 6 線ものホームがある新百合ヶ丘駅が出現。小田急沿線でも最大の駅でした。小田急線が昭和 2 年に開通したとき、もとの線路は丘の下にあって、その当時の部落のトップが、ここに駅を作ると農家の若手が農業をしなくなると危惧し、小田急は駅を柿生に持って行ったのでした。その結果、何にもないところに新百合ヶ丘ができたので新しい街作りができたのです。新区というのは、偶然というか、思い切ったことをやらないとできないのです。

### パネリスト

西村俊行氏	初代区長
瀧味雅介氏	区長（2012 年時点）
中島豪一氏	しんゆり芸術のまちづくり フォーラム会長
小島一也氏	麻生観光協会相談役
山田昌一氏	麻生区文化協会顧問
司会進行	菅原敬子 麻生区文化協会会長

**菅原**：小島さんは、この地域の歴史の研究家であり、議会の議長さんもやられたので、柿生・栗木・黒川・岡上など、30年間の経緯をよくご存じです。小島さんどうぞ。

**小島**：私も、農家のせがれなので、こうしてここにすることが夢のようです。今日にいたるまでいろいろ問題があって、言うに言われぬ問題もありました。

**【柿生地区の開発と農住都市構想】**当時、川崎市は先見の明がありました。昭和25年の頃の柿生地区は農村でした。昭和30年になるとディベロッパーによる土地開発が始まります。昭和35年には百合ヶ丘団地が、昭30-35年に、いわゆる乱開発がはじまり、農家が土地を売る様になりました。農業者が米作りを捨てて土地を売るのは問題と鈴木新之助さんという方が350万平方メートルの農住都市構想を発表しました。農業と良好な宅地の共存が鈴木さんのねらいでした。その名残が地権者による土地整理組合です。幸い大手（三井不動産、小田急）が良心的な開発をしたことが、今につながっているのではないのでしょうか。

**【開発と農業と自然保護のバランス】**歴史の中での課題は、自然だけでは生活できないということです。農業基本法が制定され、農業振興地域には農家は子や孫のためにも家が建てられない。今、それが麻生区に緑を残しました。それが黒川・岡上・早野地区です。しかし、農業振興を図りながら地域の自然をどう残しどう運営していくかが今後の課題です。開発と農業と自然保護をどうバランスをとるか。振り返ってみて、川崎市のマニフェストがよかったのではないのでしょうか？地権者の方が自分の土地でありながら、郷土愛があったのではないかと。もう一つは、市民のみなさまの知性・良心があって、今日が迎えられたのではないかと思います。

**菅原**：山田さんは細山美術館をもつ日本画家です。地域のなかで、細山、千代ヶ丘の30年の発展を見てこられました。

**山田**：**【細山には住民の助け合いの精神が】**ご承知のように、細山・向原は、S12年に川崎市に編入されたのですが、当時、川崎のチベットと呼ばれ、各谷戸に10-15戸の農家が点在するだけの辺鄙なところでした。しかし、この地区は、農業だけでなく、養蚕・養鶏・養豚・炭焼き・林業など多角的に営んでいました。細山には「結（ゆい）」という住民の助け合いの精神が旺盛でした。困った人があればみんなで助け合って暮らしていました。

**【細王舎の農機具が全国に普及】**そんなところに、明治22年先々代箕輪政次郎さんがきて、細王舎という工場をつくり農蚕機械器具の発明改良製作に着手します。当時、養蚕が盛んだったので座繰機械を作りました。2代は亥作さんが継ぎ、足踏み式脱穀機を開発、全国に広め、さらには、アジアまで普及させました。そういう人たちに細山の生活が助けられたのです。

**【モデル農村に指定】**S4年、細山は、神奈川県唯一のモデル農村に指定されます。その要件は、戸数50戸以上、一致団結して農業改善の意気込みがある、園芸・養蚕等多角化、交通機関があるということでしたが、細山はこの全ての要件を満たしていました。S4から3年間に2200円の奨励金が出たとありますが、今のお金で言えば億に近い大金でした。これを使って県の井上技師を招き、道路を拡張、深田を暗渠排水して二毛作が出来る浅田に改良、機械で草取りができるように農地区画を整理。さらには、香林寺岡本重辰住職による農繁期託児所の開設があり、秩父宮妃殿下のご来訪などがありました。

**【地権者の姿が消えないような開発】**その後、高石の一部が百合ヶ丘団地になり、多摩美団地の開発、さらには三井団地の開発などがあって、細山にも都市化の波が押し寄せました。細山では「地権者の姿が消えないような開発」を掲げ土地整理組合を結成、造成に当たって業者には45%地権者には55%が残るように造成、S55年には香林寺に細山郷土資料館を作って生活用品を展示、過去のいろんな道具を使って地域学習の場としてきました。

**菅原**：現区長瀧崎さんお願いします。

**瀧崎**：**【区制10年まで】**昭和47年に川崎市が政令指定都市になりました。その年は、札幌で冬季五輪が開催されています。翌年川崎の人口は100万人になります。そして昭和49年、小田急多摩線が開通。新百合ヶ丘駅が開業します。昭和55年には細山郷土資料館開館、昭和57年麻生区が分区。それからの10年の間に、昭和59年文化協会発足、昭和60年文化センター開館、昭和61年スポーツセンター開館と整備がすすみます。

**【川崎市の総合計画】**平成4年、区制10周年、その後平成5年に川崎市の総合計画ができ、新百合周辺に川崎副都心の形成と明記、川崎市は多摩川に沿って長いのですが、臨海部中心に発展しましたが、地域の一体性がつかみにくいと言うことで、川崎駅付近を玄関に、新百合を副都心として街作りすることとなり、小杉付近を第3の都心と位置づけました。その後平成14年に20周年を迎えるまで、マイコン地区、駅周辺商業地区の整備がすすみます。さらに平成16年には、多摩線にはるひ野駅が開業、平成19年には昭和音大が移転、アートセンター開館などがあり、新施設を含めて発展します。

**【川崎再生フロンティアプラン】**また、この間、平成17年に川崎再生フロンティアプランができ、新百合ヶ丘地区は魅力ある広域拠点形成とされています。芸術文化施設が充実し、それに関わるかたも多く、また、緑・自然の保全を活かす取り組みが行われています。今後は、調整区域・緑・まちづくりをどう融合させるかという課題も出てきていると感じています。まちづくりの課題について、関係する行政・地域の人たち・企業の方々と連携していくことが重要だと思っています。

**菅原**：ありがとうございました。

(記録 佐藤勝昭)

## 10年のあゆみ (平成17～26年度)

平成17年度 (2005年度)			
定期総会	2005.4.23		
第21回デッサン会	2005.6.5	参加者45名	
夏休み親子教室	7月～8月	全12講座 参加者286名	
からむし39号	2005.9.30		
第21回文化祭	2005.9.17-18	洋楽 17団体 洋舞 18団体	
	2005.10.28-11.2	邦舞邦楽 麻生フィル 詩吟 美術工芸	
第17回俳句大会	2005.10.12	投句者250名	
文化講演会	2005.10.22	浅井泰範氏	
第3回あさお古風七草粥の会	2006.1.7	参加者400名	
第22回かわさき市民芸術祭	舞台部門	洋舞洋楽	
	2006.3.5	(川崎市民ホール)	
	美術工芸部門	2006.3.8	絵画・書・工芸
第35回雑学教室	2006.3.27	参加者40名	
からむし40号	2006.3.31		

平成18年度 (2006年度)		
定期総会	2006.4.22	
第22回デッサン会	2006.6.4	参加者54名
夏休み親子教室	7月～8月	全13講座 参加者220名
からむし41号	2006.9.30	
第22回文化祭	2006.10.27-11.4	洋楽 2団体
		洋舞 7団体
		邦舞邦楽26
		麻生フィル 詩吟 5団体 美術工芸
第18回俳句大会	2006.10.28	投句者128名
第4回あさお古風七草粥の会	2007.1.7	参加者400名
文化講演会	2007.3.2	神山美智子氏
第23回かわさき市民芸術祭	舞台部門	邦舞邦楽
	2007.3.4	(高津市民館)
	美術工芸部門	2007.3.7
第36回雑学教室	2007.3.17	参加者44名
からむし42号	2007.3.31	

平成19年度 (2007年度)			
定期総会	2007.4.21		
第23回デッサン会	2007.6.3	参加者54名	
夏休み親子教室	7月～8月	全15講座 参加者321名	
文化講演会	2007.9.29	北條秀衛氏	
からむし43号	2007.9.30		
第23回文化祭	2007.10.27-11.3	洋楽 2団体	
		洋舞 7団体	
		邦舞邦楽23団体	
		麻生フィル	
		吟舞吟詠 5団体 美術工芸	
第19回俳句大会	2007.10.28	投句者86名	
第5回あさお古風七草粥の会	2008.1.7	参加者400名	
文化講演会	2008.2.23	加藤政行氏	
第24回かわさき市民芸術祭	舞台部門	邦舞邦楽	
	2008.3.9	(多摩市民館)	
	美術工芸部門	2008.3.12-16	絵画・書・工芸
第37回雑学教室	2008.3.11	参加者30名	
からむし44号	2008.3.31		

平成20年度 (2008年度)			
定期総会	2008.5.11		
第24回デッサン会	2008.6.1	参加者48名	
夏休み親子教室	7月～8月	全14講座 参加者485名	
からむし45号	2008.9.30		
第24回文化祭	2008.10.27-11.3	洋楽 2団体	
		洋舞 7団体	
		邦舞邦楽23団体	
		麻生フィル 吟舞吟詠 5団体 美術工芸	
第20回俳句大会	2008.10.28	投句者86名	
第6回あさお古風七草粥の会	2009.1.7	参加者600名	
文化講演会	2009.2.28	笠原登氏	
新ゆりブレ芸術祭美術展	2009.3.3-8	参観者1622名	
第25回かわさき市民芸術祭	舞台部門	邦舞邦楽	
	2009.3.1	(幸市民館)	
	美術工芸部門	2009.3.11-15	絵画・書・工芸
雑学教室	2009.3.31	参加者30名	
からむし46号	2009.3.31		

平成21年度（2009年度）		
定期総会	2009.4.25	
第25回デッサン会	2009.6.7	参加者60名
夏休み親子教室	7月～8月	全15講座 参加者449名
からむし47号	2009.9.30	
第25回文化祭	2009.10.25-11.1	洋舞 8団体
		邦舞邦楽24団体
		麻生フィル
		吟舞吟詠 5団体
		美術工芸
第21回俳句大会	2009.10.31	投句者123名
文化講演会	2009.11.1	小島一也氏
雑学教室	2009.12.6	参加者26名
第6回あさお古風 七草粥の会	2010.1.7	参加者830名
第26回かわさき市民 芸術祭	舞台部門	洋舞
	2010.3.7	(麻生市民館)
	美術工芸部門 2010.3.17-21	絵画・書・工芸
25周年記念行事	2010.3.1	
アルテリッカ新ゆり 美術展2010	2010.3.2-7	参観者1779名
からむし48号	2010.3.31	

平成22年度（2010年度）		
定期総会	2010.4.17	
第26回デッサン会	2010.7.3	参加者65名
夏休み親子教室	7月～8月	全16講座 参加者324名
からむし49号	2010.9.30	
第26回文化祭	2010.10.24-11.7	洋舞 8団体
		邦舞邦楽24団体
		麻生フィル
		吟舞吟詠 5団体
		美術工芸
第22回俳句大会	2010.10.24	投句者125名
文化講演会	2010.11.7	加藤俊二氏
雑学教室	2010.11.27	参加者16名
第7回あさお古風 七草粥の会	2011.1.7	参加者850名 募金34505円
第27回かわさき市民 芸術祭	舞台部門	邦舞邦楽
	2011.3.13	(中原市民館)
	美術工芸部門 2011.3.16-20	絵画・書・工芸
アルテリッカ新ゆり 美術展2011	2011.2.28-3.6	参観者1705名
からむし50号	2011.3.31	

平成23年度（2011年度）		
定期総会	2011.4.23	
第27回デッサン会	2011.6.5	参加者65名
夏休み親子教室	7月～8月	全16講座 参加者271名
からむし51号	2011.9.30	
第27回文化祭	2011.10.28-11.6	洋舞 7団体
		邦舞邦楽24G
		麻生フィル
		吟舞吟詠 4団体
		美術工芸
第23回俳句大会	2011.10.31	投句者133名
文化講演会	2011.11.6	小川信夫氏・ふじ たあさや氏
第8回あさお古風 七草粥の会	2012.1.7	参加者950名 募金51843円
雑学教室	2012.2.19	参加者16名
第28回かわさき市民 芸術祭	舞台部門	洋舞
	2012.2.26	(麻生市民館)
	美術工芸部門 2012.3.21-26	絵画・書・工芸
からむし52号	2012.3.31	
アルテリッカ新ゆり 美術展2012	2012.4.2-8	参観者1641名

平成24年度（2012年度）		
定期総会	2012.4.21	
第28回デッサン会	2012.5.27	参加者66名
夏休み親子教室	7月～8月	全16講座 参加者355名
からむし53号	2012.9.30	
区制30周年討論会	2012.10.5	麻生区役所と共催
第28回文化祭	2012.10.21-11.7	洋舞 8団体
		邦舞邦楽23団体
		麻生フィル
		吟舞吟詠4団体
		美術工芸
第24回俳句大会	2012.11.3	投句者142名
文化講演会	2012.11.4	千坂隆男氏
第9回あさお古風 七草粥の会	2013.1.7	参加者950名 募金48915円
雑学教室	2013.3.9	参加者20名
第29回かわさき市民 芸術祭	舞台部門	邦舞邦楽
	2013.3.23	(高津市民館)
	美術工芸部門 2013.3.26-31	絵画・書・工芸
アルテリッカ新ゆり 美術展2013	2013.3.4-10	参観者1397名
からむし54号	2013.3.31	

平成25年度（2013年度）		
定期総会	2013.4.21	
第29回デッサン会	2013.5.27	参加者53名
夏休み親子教室	7月～8月	全19講座 参加者274名
からむし55号	2013.9.30	
第29回文化祭	2013.10.21-11.7	洋舞 7団体
		邦舞邦楽23団体
		麻生フィル
		吟舞吟詠 4団体 美術工芸
第25回俳句大会	2013.10.27	投句者167名
文化講演会	2013.10.26	川染雅嗣氏
第11回あさお古風七草粥の会	2014.1.7	参加者900名 募金 53,211円
雑学教室	2014.3.15	参加者52名
第30回かわさき市民芸術祭	舞台部門	洋舞
	2014.3.2	(中原市民館)
	美術工芸部門 2014.3.11-16	絵画・書・工芸
アルテリッカ新ゆり美術展2014	2014.3.4-10	参観者1501名
からむし56号	2014.3.31	

平成26年度（2014年度）		
定期総会	2014.4.19	
第30回デッサン会	2014.6.1	参加者45名
夏休み親子教室	7月～8月	全17講座 参加者 369名
創立30周年記念式典・祝賀会	2014.11.1	
からむし57号	2014.11.1	30周年記念誌
第30回文化祭	2014.10.30-11.22	洋舞, 邦舞邦楽 麻生フィル 吟舞吟詠, 美術工芸
第26回俳句大会	2014.11.9	
文化講演会	2014.11.2	
第12回あさお古風七草粥の会	2015.1.7	
雑学教室	2015.2.28	
第31回かわさき市民芸術祭	舞台部門	
	2015.3.	
	美術工芸部門 2015.2.	
アルテリッカ新ゆり美術展2015	2015.3.9-15	
からむし58号	2015.3.31	

年度	役員						監事		会員数			
	会長	副会長		会計		総務		監事		個人	団体	賛助
17	杉本長治	加宮節子, 志村幸男, 中島邦子		笠原恒子	柳下美津子	千坂隆男	丸山博子	菅原敬子	菅原陽子	107	54	1
18	京 利幸	内野勝雄, 笠原恒子, 加宮節子		伊藤志津子	柳下美津子	菅野 明	橋本 周	菅原敬子	菅原陽子	116	47	1
19	京 利幸	内野勝雄, 笠原恒子, 加宮節子		伊藤志津子	柳下美津子	菅野 明	橋本 周	菅原敬子	菅原陽子	113	47	1
20	菅原敬子	伊藤胡桃, 笠原恒子, 千坂隆男		佐藤百合子	山室茂樹	佐藤勝昭	橋本 周	伊藤志津子	菊池武久	105	45	1
21	菅原敬子	伊藤胡桃, 笠原恒子, 千坂隆男		佐藤百合子	山室茂樹	佐藤勝昭	橋本 周	伊藤志津子	菊池武久	107	41	1
22	菅原敬子	伊藤胡桃, 笠原恒子, 千坂隆男		佐藤百合子	山室茂樹	佐藤勝昭	橋本 周	伊藤志津子	菊池武久	105	36	1
23	菅原敬子	伊藤胡桃, 笠原恒子, 千坂隆男		伊藤志津子	山室茂樹	佐藤勝昭	橋本 周	佐藤百合子	菊池武久	102	36	1
24	菅原敬子	菅野 明, 千坂隆男, 横須賀朝子		岩田輝夫	山室茂樹	佐藤勝昭	橋本 周	伊藤志津子	菊池武久	104	36	1
25	菅原敬子	菅野明, 山室茂樹, 横須賀朝子		岩田輝夫	関森田鶴子	佐藤勝昭	橋本 周	伊藤志津子	菊池武久	101	36	1
26	菅原敬子	菅野明, 山室茂樹, 横須賀朝子		岩田輝夫	関森田鶴子	佐藤勝昭	橋本 周	伊藤胡桃	伊藤志津子	101	35	1

年度	各部長				
	文化サロン	舞台芸能	美術工芸	アカデミー	広報
17	京 利幸	菊池武久	山本絢子	吉沢伊三夫	松田洋子
18	加藤孝子	中島邦子	山本絢子	吉田 功	松田洋子
19	加藤孝子	中島邦子	山本絢子	吉田 功	松田洋子
20	加藤孝子	中島邦子	山本絢子	吉田 功	松田洋子
21	加藤孝子	中島邦子	山本絢子	吉田 功	松田洋子
22	加藤孝子	中島邦子	山本絢子	吉田 功	松田洋子
23	森妙子	中島邦子	山本絢子	吉田 功	関森田鶴子
24	森妙子	中島邦子	山本絢子	吉田 功	関森田鶴子
25	森妙子	中島邦子	山本絢子	吉田 功	関森田鶴子
26	森妙子	中島邦子	山本絢子	吉田 功	関森田鶴子

年度	受賞者	
	川崎市文化祭奨励賞	文化振興賞
17	丸山博子	横須賀朝子 早野聖地公園里山ボランティア
18	千坂隆男	笠原 登 麻生童謡をうたう会
19	志村幸男	田宮正一 笠原 登, 山田昌一美術館
20	山本絢子	吉澤篁村, 麻生いけばな協会
21	内野勝雄	馬場身江子 田口精一
22	藤田 皓	松田洋子 佐藤勝昭
23	吉田 功	狭間裕子 麻生洋舞ぐるーぷ
24	山室茂樹	松本澄里 笠原恒子
25	本玉秀夫	内野勝雄 NPO 麻生市民活動サポートセンター
26	池内英夫	渡辺邦義 佐藤英行



## 編集後記

麻生区文化協会は今年創立 30 周年を迎えます。30 周年記念事業実行委員会では、11 月 1 日に、記念の劇「わが町しんゆり」の公演、それに続く記念式典と祝賀会を企画していますが、この日にあわせて記念誌を発行し、来ていただいた方々にお渡しし、読んで頂こうということが決まり、私が編集委員長に指名されました。

麻生区文化協会ではこれまで、10 周年、20 周年、25 周年の節目に、立派な記念誌を発行してきました。読み返してみると、どの周年記念誌も、祝辞を中心に、アーカイブ資料としての記録性に重点を置いた構成となっております。

30 周年記念誌編集委員会では、これまでの記念誌のスタイルにとらわれず、ビジュアルで、読み物として面白く、麻生区文化協会の活動がイメージしやすい記念誌を作ろうという編集方針を立てました。この方針に沿って、麻生区の文化をになうキーパーソンたちにインタビューを実施、麻生の文化の背景となった地域の歴史をふりかえる記事については編集委員が分担執筆、また、先輩会長に 30 年の想いを執筆依頼、文化協会の各種活動のレポートを各部に執筆依頼しました。

各執筆者は上記編集方針を快く受け入れて真摯に対応していただきました。おかげさまで、素晴らしい冊子を作ることができました。また、株式会社エリアブレイン岩倉様には、発行に至るまで多大なご助力をいただきました。編集委員会を代表してご協力に深く感謝申し上げます。

(編集委員長 佐藤勝昭)

麻生区文化協会会報「からむし」57 特別号	
麻生区文化協会創立 30 周年記念誌	
発行	麻生区文化協会 会長 菅原敬子 住所 川崎市麻生区万福寺 1-5-2 麻生市民館内
編集	麻生区文化協会創立 30 周年記念誌編集委員会 岩田輝夫、梶 亨、佐藤勝昭、関森田鶴子、 千坂隆男、橋本周、山室茂樹、横須賀朝子
発行日	2014 年 11 月 1 日
印刷	株式会社エリアブレイン

表紙題字 「からむし」笠原秋水

表紙絵 「新しい風と創造のイメージ」佐藤勝昭